

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-06-04

東京発掘プロジェクト 水辺編I

高村, 雅彦 / 皆川, 典久

(出版者 / Publisher)

法政大学江戸東京研究センター

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

46

(発行年 / Year)

2019-03

法政大学

EToS

江戸東京研究センター
Hosei University Research Center for
Edo-Tokyo Studies

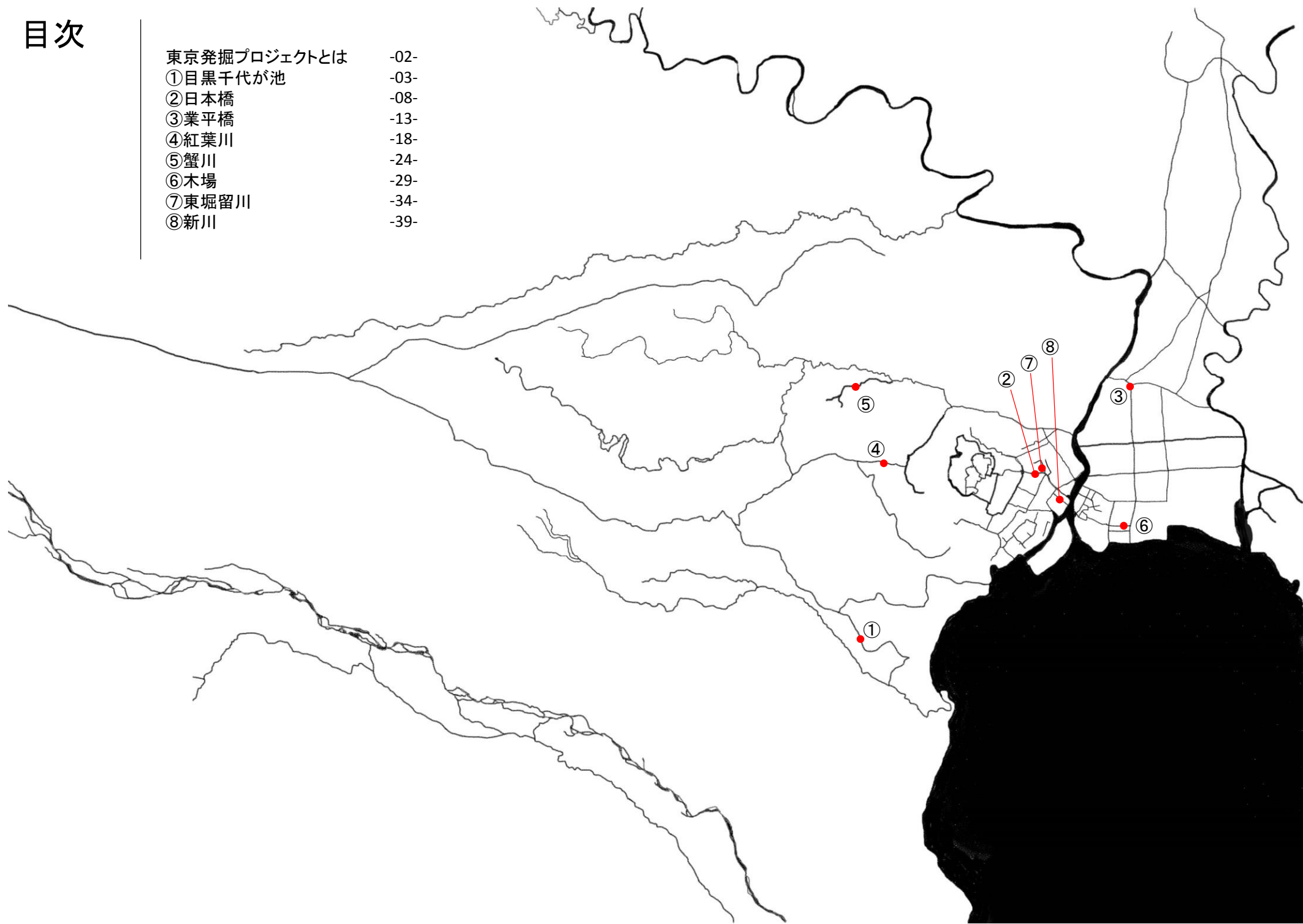
東京発掘プロジェクト 水辺編 I

法政大学江戸東京研究センター編 高村雅彦・皆川典久監修

第十三井筒屋丸

目次

東京発掘プロジェクトとは	-02-
①目黒千代が池	-03-
②日本橋	-08-
③業平橋	-13-
④紅葉川	-18-
⑤蟹川	-24-
⑥木場	-29-
⑦東堀留川	-34-
⑧新川	-39-



法政大学 教授 高村雅彦

この報告書は、江戸東京研究センター「東京発掘プロジェクト 水辺編」の2018年度の成果をまとめたものである。東京の水辺を対象に、その土地や建築、人々の営みを歴史的に解読し、その価値を発掘して、そこからさらに水とまち、人の関係を復元しながら新たなデザインの提示に至るまでを目指したプログラムである。当センターの数多くのプロジェクトにあって、このように調査、研究を経て、提案に至るまで一貫して考えようとするものは少ない。

2018年度は、法政大学大学院デザイン工学研究科建築学専攻の院生によって、場所の選択や内容の分析がおこなわれた。文科省による私立大学研究ブランディング事業の採択によって設立された当センターにあって、まさに学内のインナー・ブランディングと呼ぶにふさわしい活動と言える。しかも、テーマの発想やプロジェクトの推進は、東京スリバチ学会会長の皆川典久氏が中心的に担っていただけることになり、強力なサポートを得ることができたこともじつに嬉しい。このプロジェクトは来年度も継続していく。2019年度は、学内だけでなく、ぜひ地域や外部の方々も巻き込みながら、東京の水辺の未来と一緒に創造していきたい。

「東京発掘プロジェクト」とは？

東京スリバチ学会 会長 皆川典久

東京の足元には、数多くの川や水路・運河が埋もれている。それらをリアルに「発掘」し、歴史的な記憶を現代の風景に組み込み、かつて「水の都」とも呼ばれた東京の未来像を妄想する試みである。

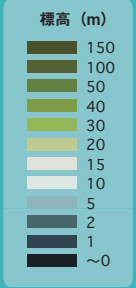
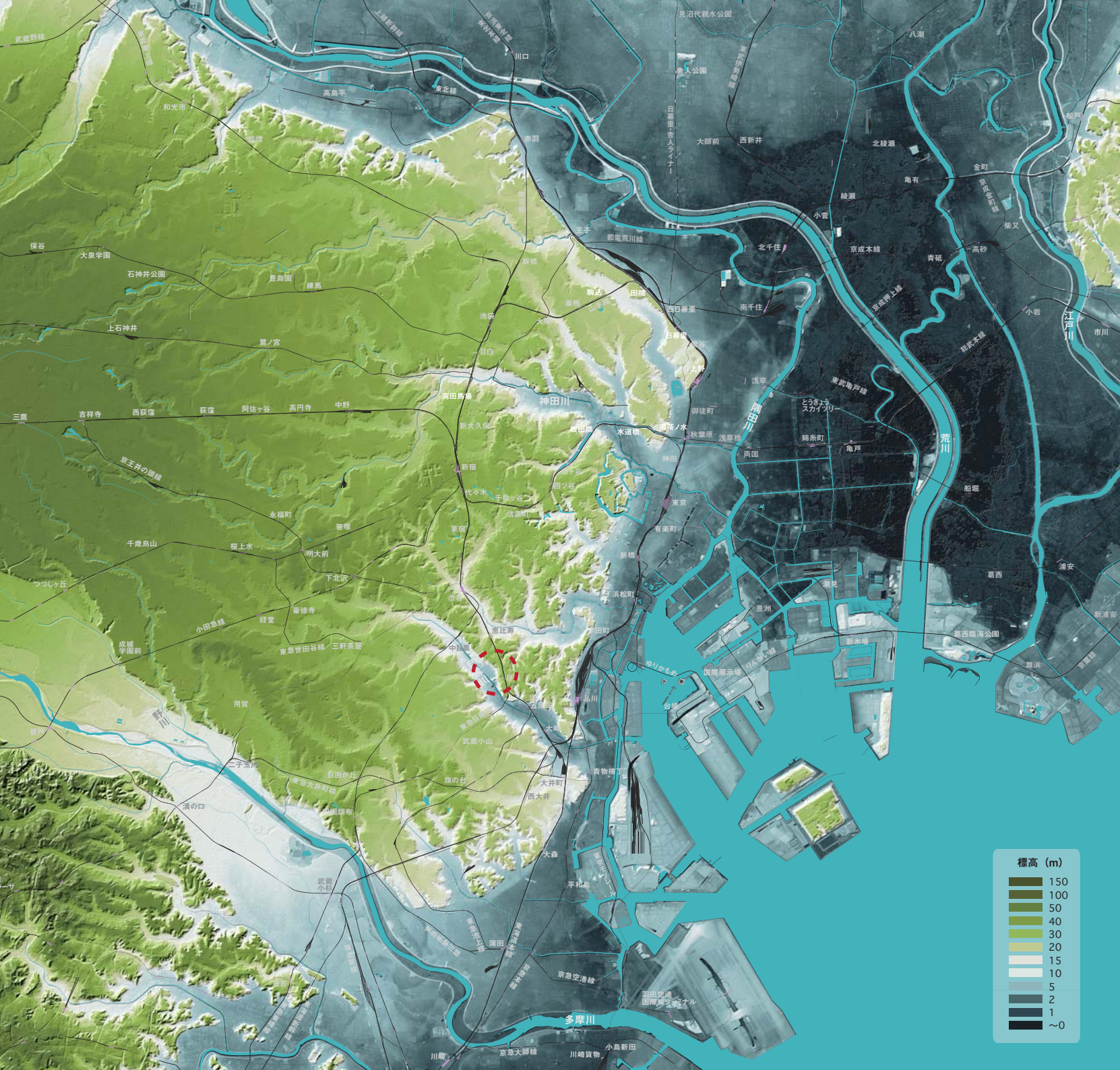
東京の都市域は、武蔵野台地と呼ばれる洪積台地と、荒川・隅田川が形成した三角州・海岸平野（沖積低地）にまたがるよう広がっている。前者を「山の手」、後者を「川の手」と区別して呼ぶように、地形的な成立の相違が、それぞれの都市形成史や文化の違いにはっきりと表れている。

「山の手」には、窪地の湧水を源とする都市河川が数多く流れていた。川は蛇行しながら台地に河谷を刻み、起伏に富んだ土地を形成した。川沿いの肥沃な土地は農地に利用され、いくつもの湧水は江戸の大名庭園などにも利用されていた。都市河川の多くは高度成長期に蓋をされて現在は暗渠化されてはいるものの、川の蛇行を想わせる暗渠路が裏路地に残されている。

一方、台地の尾根筋には江戸期以来、玉川上水をはじめとした多くの用水が築かれ、高燥の台地を潤してきた。数百年の間、都市の活動を支えてきたインフラでもあった水路網は、近代化のなかで廃止され、今ではその存在も忘れられがちである。尾根筋の水路はかつて、谷筋の自然河川と接合され、武蔵野台地には壮大な水のネットワークが構築されていた。土地の起伏や高低差を活かした山の手ならではの「水の都」を呈していた。

「川の手」では、運河や掘割、水路が縦横にはりめぐらされ、壮大な舟運ネットワークが形成されていた。近世・近代と、東京の経済活動を支えるインフラとして機能しただけでなく、まさにベネチアのような「水の都」の都市景観を誇っていた。それらの多くは震災復興や戦災復興の際、瓦礫処理のために埋め建てられ、復興のための種地として利用されてきた。すなわち、運河や掘割・水路の多くは、撤去されずに足元に埋没しているわけで、発掘されるのを待っている、とも言える。

「東京発掘プロジェクト」の掲げる「水の都」復活は、歴史的景観の復権・再生にとどまらず、未来に向けた都市像の模索でもある。すなわち、循環型社会の構築を視野に入れた、持続可能な都市づくり・地域づくりの実践的探求に他ならない。文化的アイデンティティと環境バランスの再生を促すヒントのひとつが「水」には潜んでいると思う。したがって「発掘プロジェクト」では、「水」をキーワードと捉え、豊か風土を再構築する理念と方法を探ってゆきたい。「水の都」と称された江戸・東京の価値と可能性を発掘し、自分たちが住む町、あるいは地域コミュニティの将来像を具体的に構想（妄想）してみよう。



目黒千代が池

目黒千代が池 復活計画

- 18U1103 飯塚 まり亜
- 18U1120 熊切 健
- 18U1138 木下 将吾
- 18U1147 畠山 望美
- 18U1151 松尾 諒

絵図と名所



図1 絵本江戸土産10編「目黒千代が池」
(国立国会図書館デジタルコレクション)



図2 名所江戸百景「目黒千代が池」
(国立国会図書館デジタルコレクション)

江戸には数多くの名所があり、それらは絵図として描かれている。

目黒千代ヶ崎にあった千代が池を描いた図1、図2の絵図はどちらも滝が印象的で、大規模なものだったことが伺える。この池は江戸時代、大名屋敷の庭園内にあった。基本的には大名屋敷の庭園が一般庶民に開かれることはないが、名所として描かれているということは庶民が立ち寄れたあるいは外から覗くことができた可能性もある。また、地形図を重ねてみると池のほとりは大名屋敷の敷地外であることもわかる。

千代が池はもともと湧水であったが、図1、図2の絵図に描かれたような立派な滝を作るには上水を利用するのが一般的なので、三田用水から水を引いて、湧水と用水の併用をしていたと考えられる。千代が池以外にも、江戸の武家屋敷庭園で、上水のみや、上水と湧水を併用して造られた滝は、水戸藩徳川家上屋敷（後楽園）や郡山藩柳沢家下屋敷（六義園）高須藩松平家上屋敷、尾張藩徳川家下屋敷（戸山荘）など数多くあった。

このような風光明媚な水辺空間を発掘するため、江戸の大名屋敷の庭園内にあった千代が池と滝や、その水路の変遷を追う。

水路及び庭園想像図



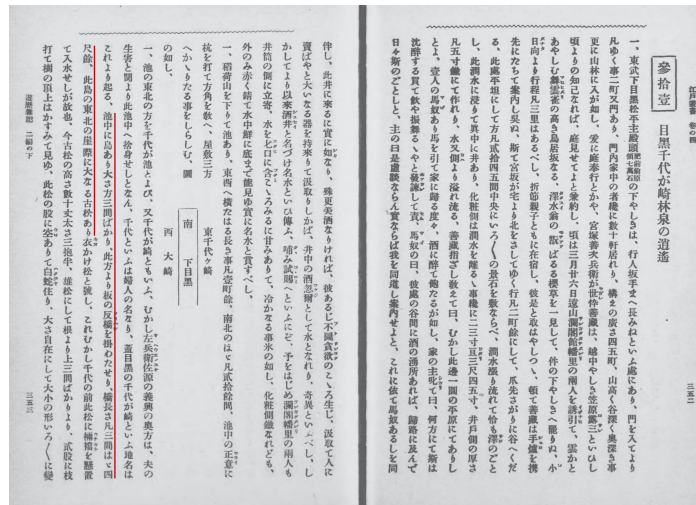
図3 明治12年、千代が池を通る三田用水
陸軍省『東京府下三田村旧水車場地内務省へ返付ノ件』
(国立公文書館デジタルアーカイブ、明治12年)



図4 十方庵遊歴雑記「目黒千代ヶ崎林泉の逍遙」
江戸叢書：2巻 巻の四
(国立国会図書館デジタルコレクション)

この水路の発掘にあたって池や滝の位置は重要だが、江戸時代の屋敷絵図や庭園図は見つかっておらず詳細な水路の情報がないため、資料をもとに江戸時代の水路及び庭園の想像図(図5)を作成した。作成にあたって、地形は明治期に変化がないものと仮定して、明治42年の地形図(図8)を参考にした。詳しい水路や庭園の様子については、千代が池を通る三田用水(図3)と十方庵遊歴雑記「目黒千代ヶ崎林泉の逍遙」(図4)を参考にした。図3には三田用水から池までの水路が詳細に描かれているため、明治42年の地形図に地形や道、三田用水を合わせて落とし込んだ。

図4には、庭園を散策した際の記録が文章と簡単なスケッチで記されており、滝の大きさや流れる方向、池や島の大きさ、亭の位置など、庭園を構成する池や滝の位置関係と大きさを読み取った。文章中の記述や挿絵からも池には三田用水から水を引き、その水は周辺の田畑に使用された後に目黒川に排水されていたことがわかる。また、敷地内においては台地上に亭があり、そこから眺めていたことが分かっている。滝は、亭がある台地から眺めることもできたし、江戸時代に描かれた絵図(図1、図2)のように、低地の池のほとりから見上げることでもできたことが伺える。



- 十方庵遊歴雑記「目黒千代ヶ崎林泉の逍遙」(図4) 赤線部より
- 滝：武州(武蔵国)第一の名滝
 - 全体の長さ 3~4丈(約10m)
 - 一の滝 西から東へ、なだらかに
 - 二の滝 東から西へ
 - 三の滝 西から南へ、逆流
 - 島：3間(約5.46m) 四方
 - 池：長さ1町半(約163m)、幅24~25間(約45m)
 - 亭：滝の真向に池を隔てた丘の上にある
 - 滝のそばまで24~25間(約45m)



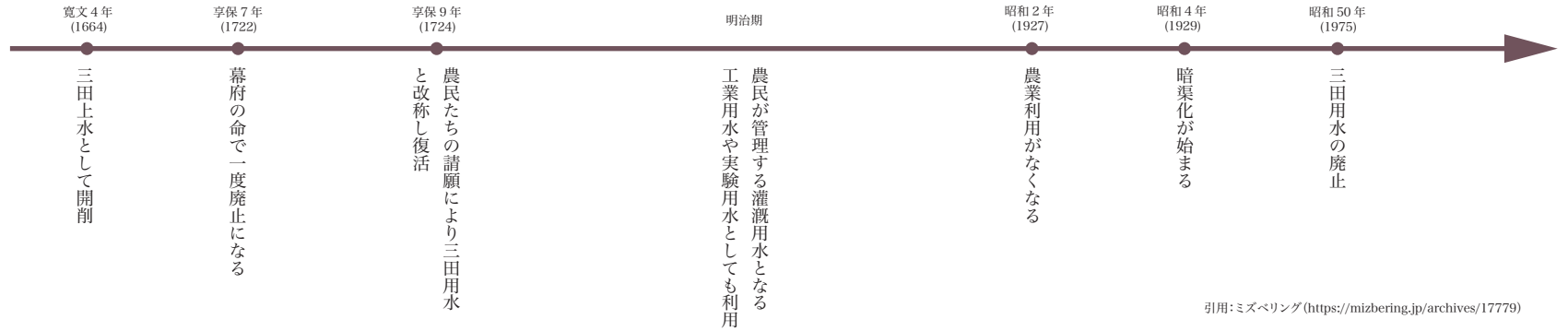
図5 水路及び庭園想像図

地形と水路

江戸時代（図6）、明治時代初期（図7）、明治時代後期（図8）、それぞれの地形図を見て行くと、どの地図でも三田用水が確認でき、水路には変化がない。昭和前期の地図（図9）を見ると、部分的に暗渠化されていることがわかる。それぞれの地形図からは起伏に富んだ地形や、明治後期の地形図では池も確認できる。

上水として誕生した三田上水は、一度廃止した後、灌漑用水となり、明治期には流路がヒューム管（コンクリートと鉄の管）に変えられるなど、技術的に改良したことでビールや火薬製造などの工業用水や研究機関の実験用水として利用された。

江戸時代の屋敷の名前の向きから、入口側が東側であることがわかり、台地に御殿、斜面地から低地にかけて庭園が造られていたと考えられる。



引用:ミズベリング (<https://mizbering.jp/archives/17779>)

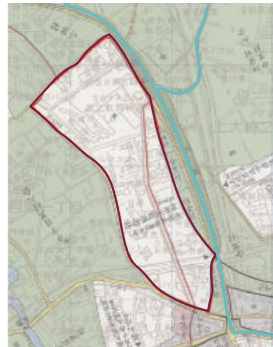


図6 島原藩松平家抱屋敷（絶景観）敷地
児玉幸多ら『復元・江戸情報地図』
（朝日新聞社、1994年）



図7 明治初期敷地
陸軍参謀本部『第一軍管区地方2万分1迅速測図原図』
（農研機構農業環境変動研究センター、明治13年）

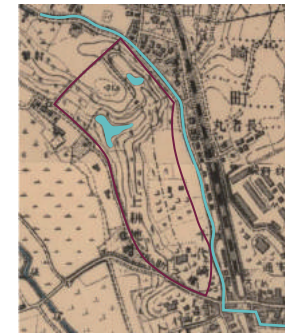


図8 明治後期敷地
日本帝国陸地測量部『東京一万分一地形図』
（明治・大正・昭和東京一万分一地形図集所収、明治42年）

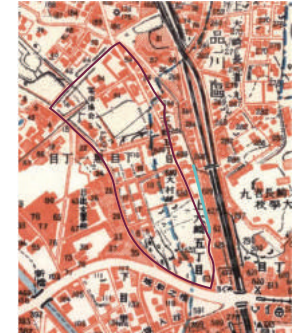


図9 昭和前期敷地
日本帝国陸地測量部『東京一万分一地形図』
（明治・大正・昭和東京一万分一地形図集所収、昭和3年）



現在の千代が池周辺

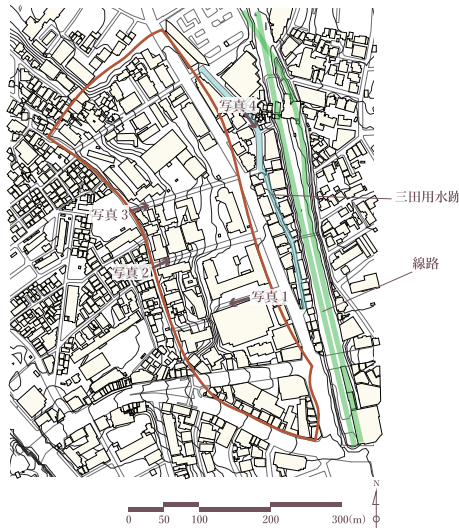


図10 現在敷地
（国土地理院基盤地図情報より作成）



写真1



写真2



写真3



写真4

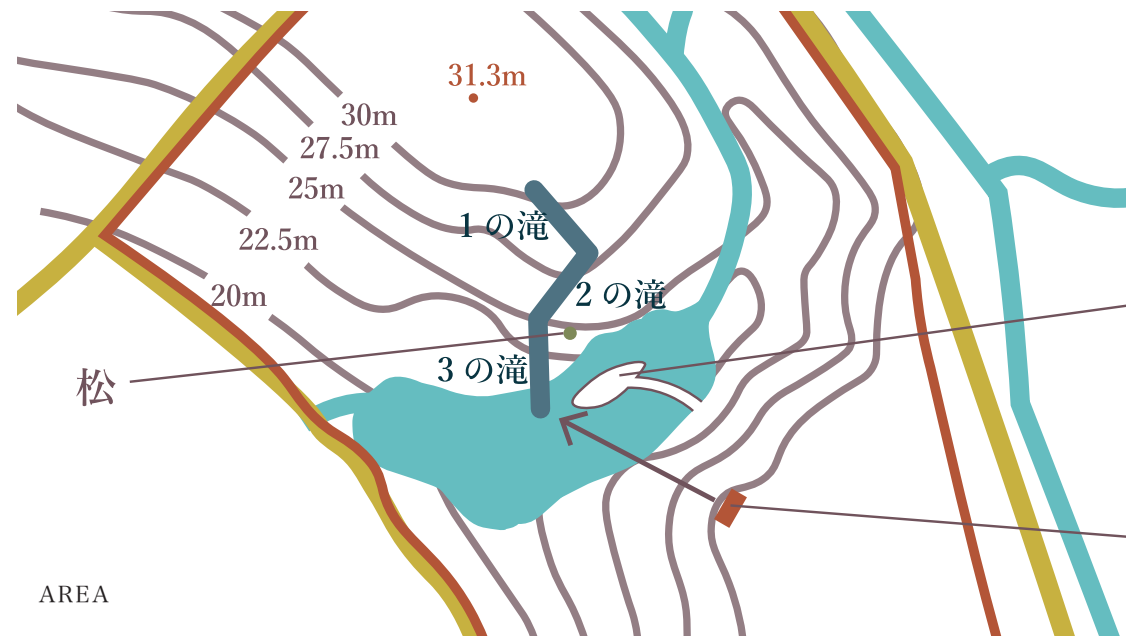
目黒駅から北西に位置するこの敷地は、非常に高低差が大きな土地である。メインの通りはおしゃれな店が立ち並び、車も人通りも多いが、一本横道に入ると傾斜が急かつ長い坂道となり、その道沿いにはマンションが立ち並ぶ。この敷地周辺の最大の特徴は高低差である。坂の上に立ち、遠くを眺めると、かつて絶景観と言われていた理由を感じ取ることができた。また、明治時代の地図には千代が池が存在する部分の地形がえぐれているようになっているが、現在では埋め立てられ均されている。

メインの通りを挟んだ東側の細い道には、三田用水が流れていたようだが、面影を感じ取ることが難しかった。全体を通してかつて三田用水、千代が池という大きな池、また滝があった場所だが、現在ではほとんど水に関する痕跡は残っていないことが分かった。

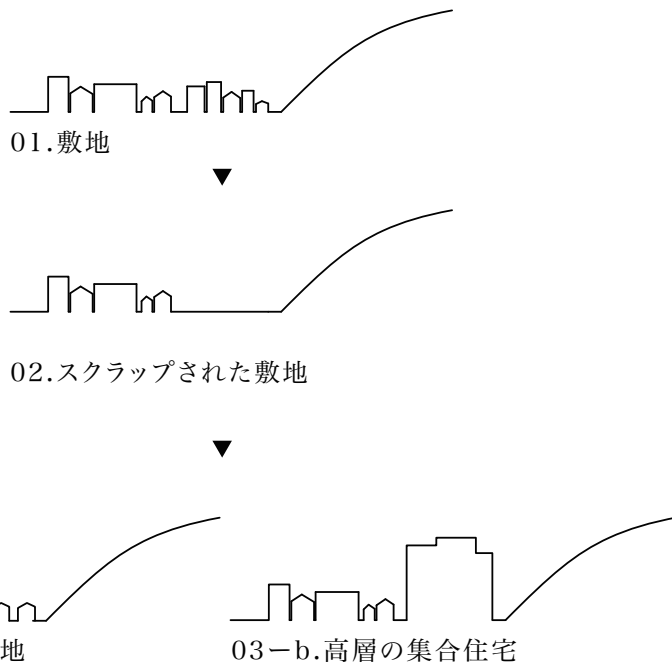
歴史資源の水の再発掘による 人々の居場所の創出

CONTEXT

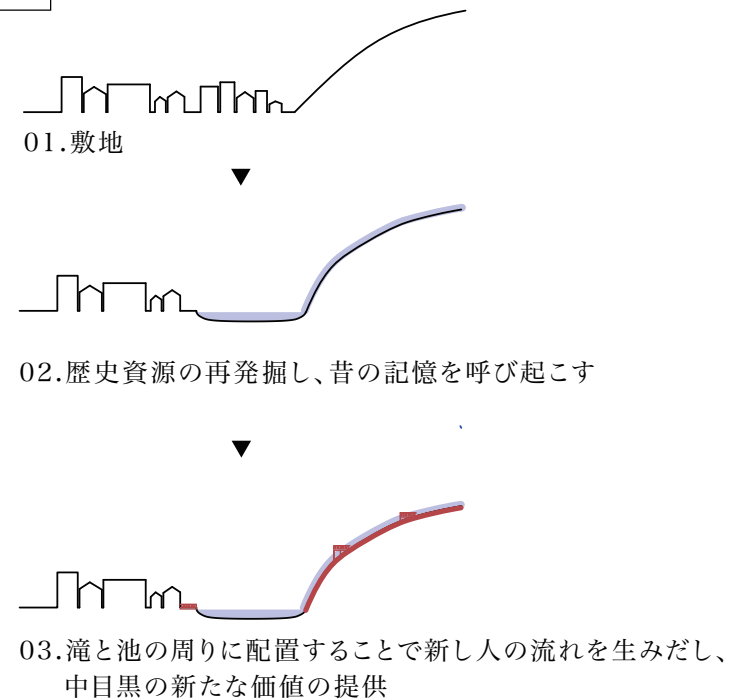
都市の更新により現在無くなってしまった、滝や池を復活する。それらが、今の時代の人々の生活に合う、新しい使い方の提案である。



現状



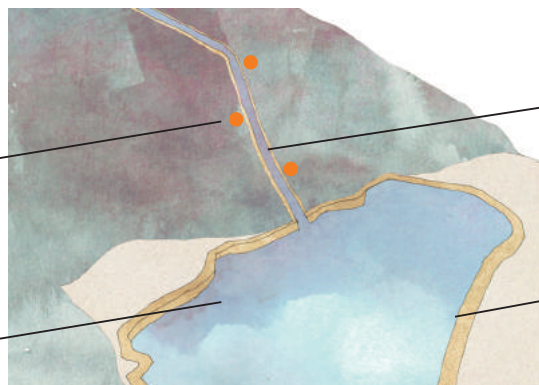
提案



IMAGE

街を見渡せるビュースポットをいくつか設ける

今は無い、かつての池の再現

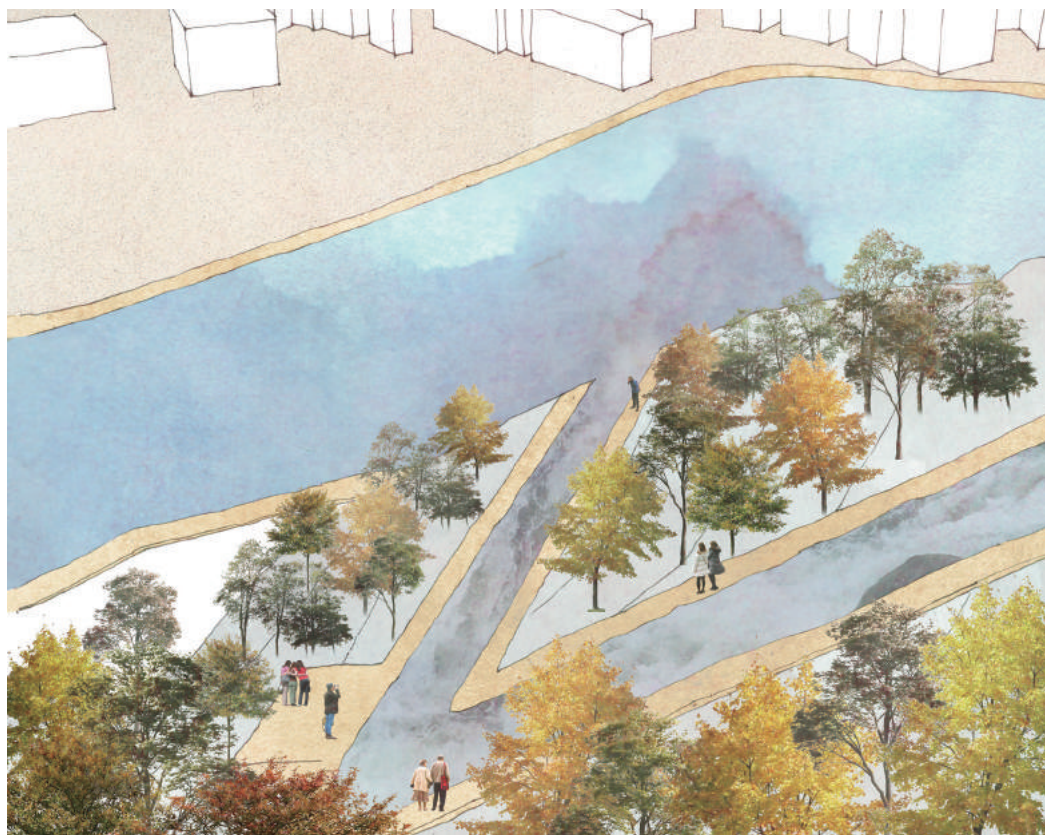


滝に添わせたボードウォーク

池を囲うデッキは地元住人のお散歩コースになる

計画全体の様子

1. 滝の上から見下ろした、湖や周辺の景色

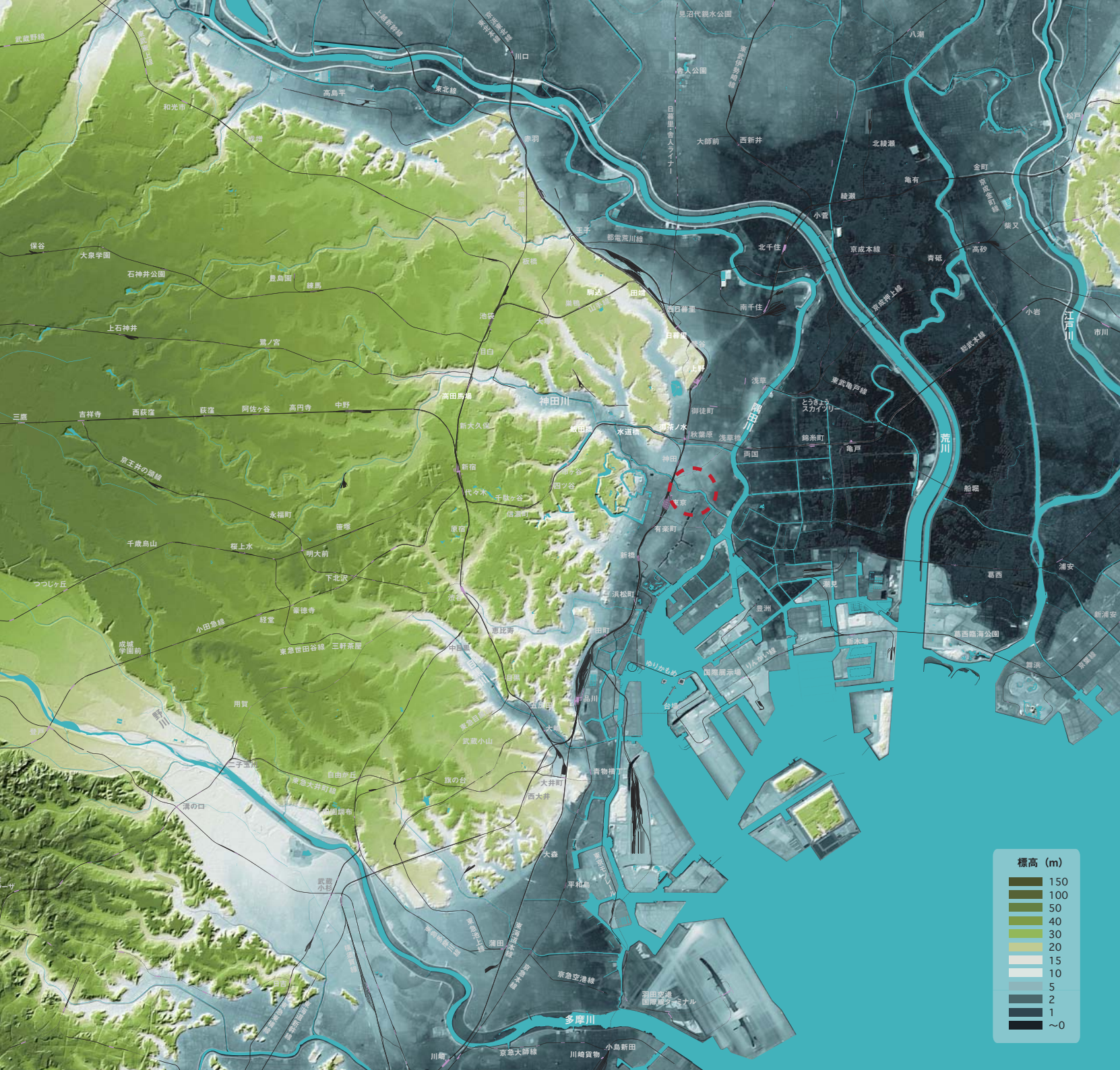


滝が新たな観光資源として、江戸時代にあった人の賑わいが生まれる。

2. 湖を囲うデッキから見上げた、滝や山



滝を沿うように挿入されたボードウォークは、新たな景色や光景を体感する。

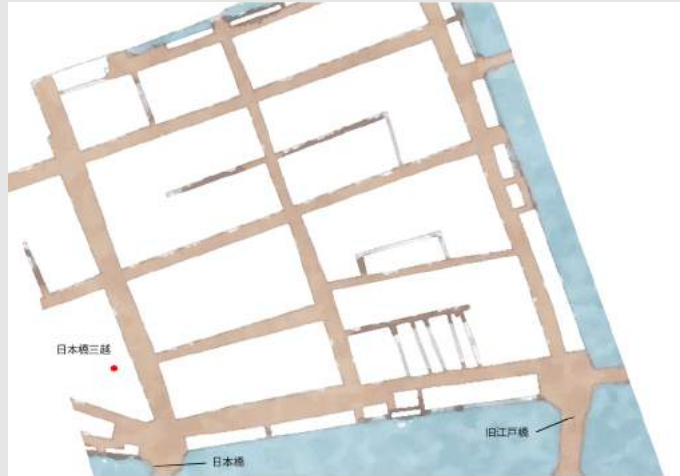


日本橋

■ 東京 魚河岸のあゆみ 参考文献：伊藤裕久『日本橋からみた水都の基層構造』, 都市史研究, 2017 年

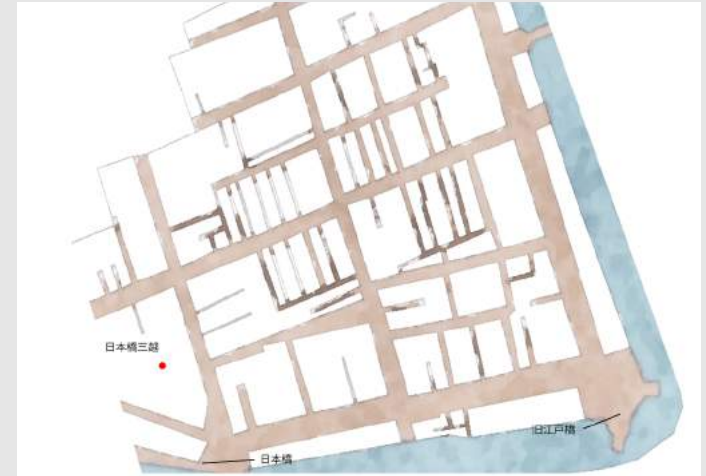
- 1 1610 年ごろ (江戸初期)
将軍のご飯調達の残りの魚を売り出したことから日本橋魚河岸スタート
- 2 1872 年 (明治 5 年)
2 階建ての長屋に建て替え
- 3 1876 年 (明治 9 年)
【河岸地公有化】
地主は魚納屋の商人に建物を売る
長屋は共同建築となる

(1) 明治 17 年 明治参謀本部測量地図



- 3 1911 年 (明治 44 年)
日本橋の架け替えと共に 2 階建て納屋から 3 階建てへ建て替え

(2) 大正元年 地籍地図



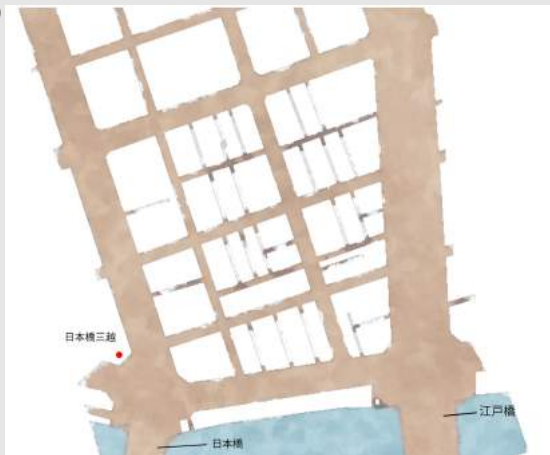
■ 地図の特徴

河岸地が公有化されてからの地図である。まだ魚河岸も生きている様子が見られる。今回主に取り上げた路地はまだ見えない。

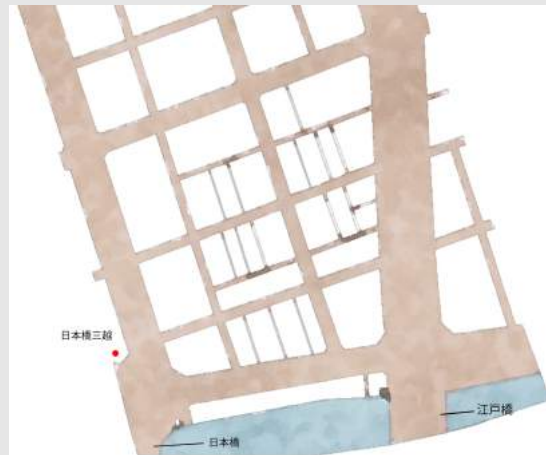
有力な板舟権をもつ問屋が敷地を買ってそこに路地を通して魚売り場としていた路地が見られる。その他の路地も増えている。

- 4 1923 年 (大正 11 年)
関東大震災で魚河岸全焼
築地市場へ移転

(3) 昭和 7 年 火災保険地図



(4) 昭和 20 年 火災保険地図



(5) 現在 国土地理院地図



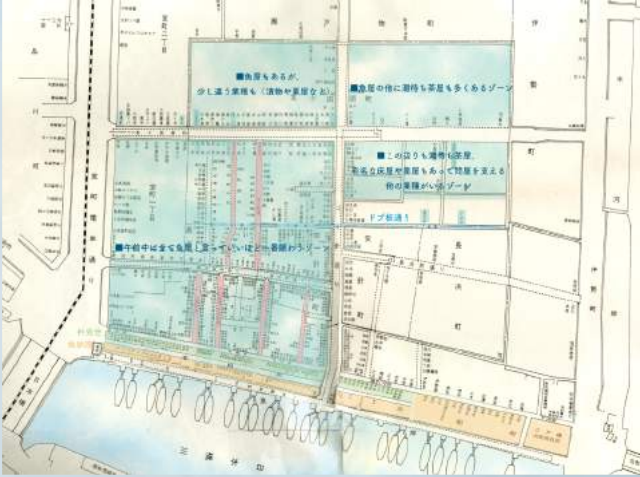
- 5 2018 年 (平成 30 年)
豊洲市場へ移転

江戸橋が架け替えられ、河岸地含め日本橋全体の街区が大きく削られた。また日本橋から続くメインロードの道幅も大きく変わっている。

大正元年 - 昭和 7 年大きな変化はないが、路地が徐々に減ってきていることがわかる。

大正時代に通された路地が今の街区にも残っていることがわかる。ただし、残る路地は私道の可能性が高く、ビルの壁に囲まれているボイドとなっている。

魚河岸システム 展：尾村幸三郎『日本橋魚河岸物語』, 青蛙選書, 1984年, 日本橋魚市場の図 (大正十年) に筆者加筆



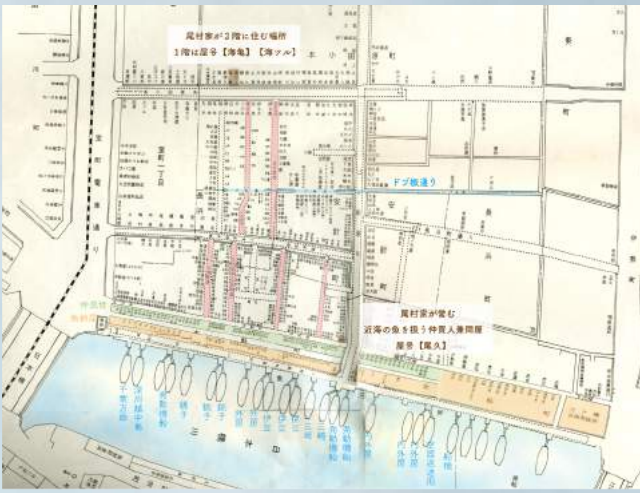
【エリアよっての違い】
 ~日本橋魚河岸物語を参考に~

大正10年当時の日本橋魚河岸エリアは『日本橋魚河岸物語』(青蛙選書:大正10年:尾村幸三郎)によると、図のような4つのイメージで分けられていたようだ。(室町1丁目・本舟町:魚市場だらけ、本小田原町:魚市場と違う業種の店もある、潮待ち茶屋も多いゾーン、潮待ち茶屋も多い有名な床屋や菜屋など魚河岸を支える店のあるゾーン、)右下のエリアについては言及がなかったが、賑やかで豊かな魚問屋が広がっていたように思う。また米河岸の傘下であった伊勢町との間には、見えない都市の境界があった。

発掘したもの



出展: △中央区立図書館データベースより筆者加筆▽筆者撮影に加筆 出展: 中央区沿革図集より筆者加筆



【仲買人兼問屋「尾村家 尾久」を例に】
 平田船の配置

魚河岸で働く商人は日本橋エリアで生活もしていた。また、居住空間と自分の売り場空間は別の町というのが魚河岸のスタンダード。尾村家が「尾久」という屋号の店を構える20軒通りの角から本小田原町の2階住宅の1階は「海亀」と「海ツル」という屋号の間屋が店を構えていたという。このように水辺と居住空間と都市が、人の動きによって朝から活発に入り乱れていた。また、朝の3時に産地からの魚を魚河岸で販売するためにはまず平田舟を通して魚を揚げる。平田舟は産地によって場所が決まられており、図の通り。



【大正元年地籍台帳】

一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五
二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二

出展: 尾村幸三郎『日本橋魚河岸物語』, 青蛙選書, 1984年, 日本橋魚市場の図 (大正十年) に筆者加筆 出展: 大正元年地籍台帳より筆者加筆



【日本橋 魚河岸の水辺・都市の繋がり】
 ~1日の流れ~

- ① ~AM3:00 産地から魚を乗せた舟がやってきてそれぞれの産地の平田船へ
- ② AM3:00~平田舟から江戸橋荷捌き所に運び、店(問屋)ごとに魚を分ける
- ③ AM3:00~「小揚げ人」がやってきてそれぞれの店(問屋)へ配達
- ④ ~AM6:00 料亭や寿司屋などに所属の買い出し人へ
- ⑤ AM6:00~買い出し人が待機している「潮待ち茶屋」へ「軽子」が届ける
- ⑥ AM10:00~AM11:00 片付け・店じまい
- ⑦ AM11:00~自宅へ

今でも日本橋のたもとには、関東大震災前に魚河岸がまだそこにあった最後の時代の痕跡が残る。川側に閉じている川沿いの建物には、当然川に開いている場所は窓だけで降りれるような場所も今はない。右上の写真より、(1)水のレベル(2)納屋裏通りのレベル(3)町のレベル(GL)の3つが震災前まであったことがわかるが、現在の右下の写真より、(1)と(3)は確認できるが、魚河岸がなくなった今(2)はこのたもとの痕跡が残るのみでレベルは消えている。(2)のレベルは何に使われていたのかという納屋裏通りと言って、午前中は平田舟から魚納屋にかけて魚を運び運搬の道として、午後は問屋や仕事の終わった船乗りが一杯飲みに来る寿司屋や居酒屋などが店を開け椅子や机を出して賑わうオープンスペースに様変わりした。上の写真からもわかるように、(3)のGLから階段を降りて誰でも(1)や(2)へ簡単にアクセスできた。また午後は誰でも納屋裏通りを通過して地階の料理屋に入居りすることができるということが魚河岸第3の革新で納屋を建て替えて変わったアピールポイントのひとつだった。納屋のあった場所はビルが立ち並ぶが、魚河岸の痕跡は川側に隠れている。大正時代から少しずつ出てくる路地の中で「新道」は板舟権を多く持つ有力な問屋が町内に自宅を設け、その敷地内に1本の路地を通して板舟を広げて商売できるようにした道である。日本橋地区には7本の新道があり、中でも米嘉新道は大正元年地籍地図・台帳にも「本船町7ノイ米倉嘉兵衛」と記されている。また、ドブ板通りは元水辺(下水)で板を上貼って人々を通る道にしていた。今は暗渠である。

1923 年前後から継承するもの



【新道】



①米嘉新道
道幅:4320mm



②大善新道
道幅:4410mm



【商い】
③新道?
道側に開く店が他に比べて多い



④元ドブ板通り
今は暗渠



⑤大勝軒
中華食堂



⑥神茂
はんぺん屋



⑦八木店本店
経節



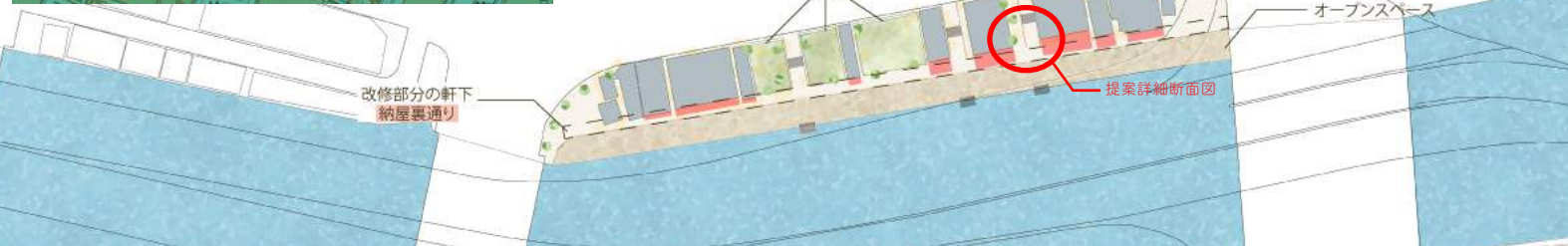
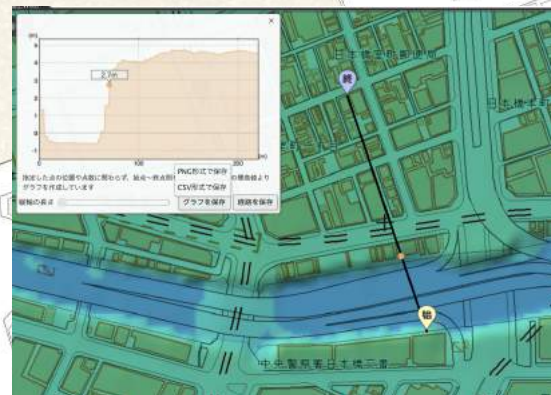
⑧山本海苔
海苔

出展：△国土地理院地図より筆者加筆、▷筆者撮影

提案：水辺一新道一室町エリアまでをつなぐ

かつての商いの中心であり、表だった水辺空間（納屋裏通り）の活気を取り戻し、新しくオープンスペースとして提案する。
現在では、暗く窓もない裏になっており、かつて新道であり魚市場があった通り沿いに1階部分を抜いて飲食店やショップを入れることで、かつての活気を取り戻す。

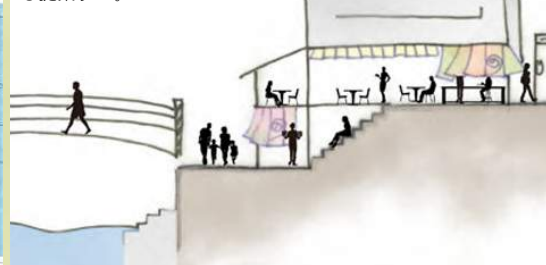
■現代 提案敷地図 1/2000 ▽国土地理院地図より、▷立面図、断面図共に筆者作成



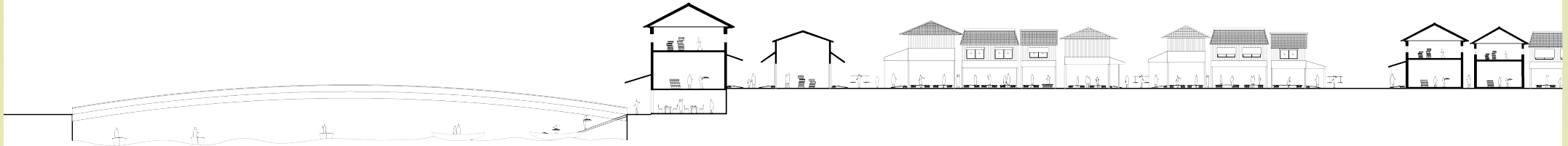
■現代 提案詳細立面図（拡大スケッチ）
店を路上に展開させつつ、都市の線形ボイドの活用を図る。



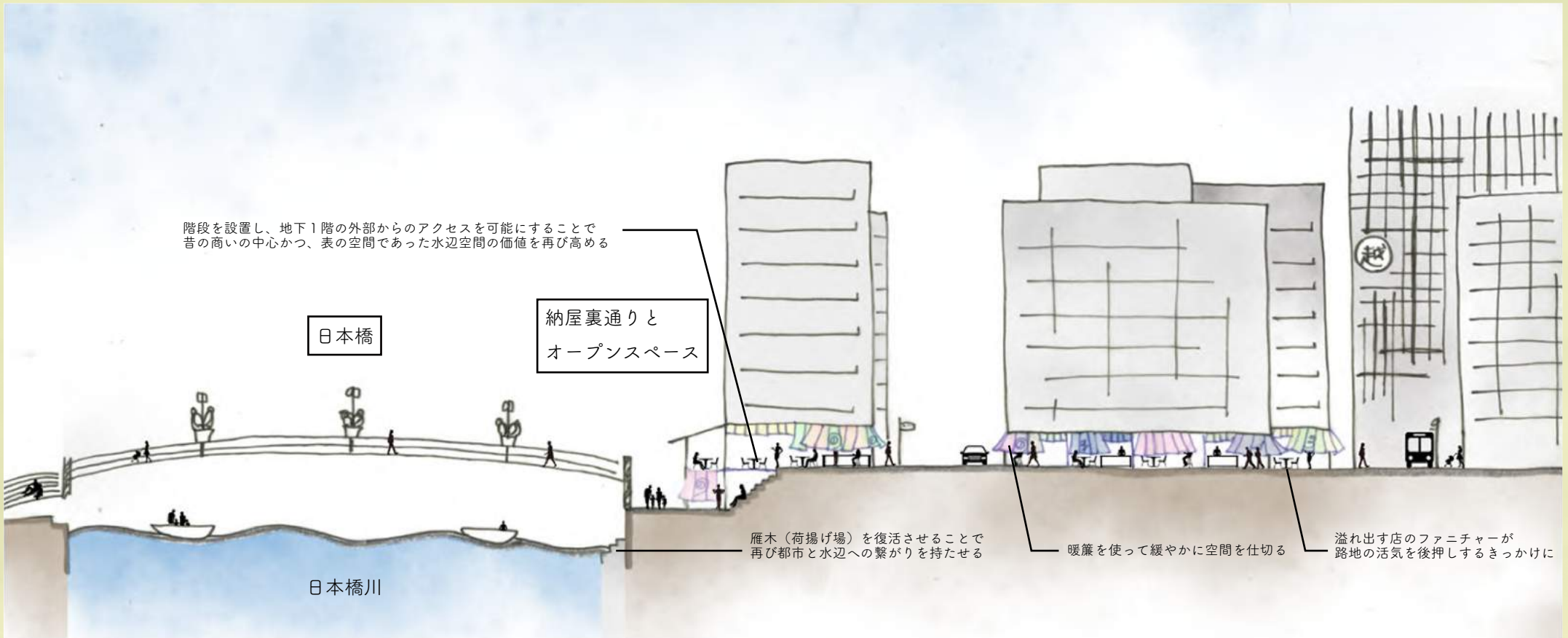
■現代 提案詳細断面図（拡大スケッチ）
ビルを改修し、テラスのような半屋外空間である納屋裏通りを提案する。

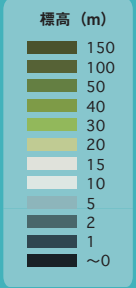
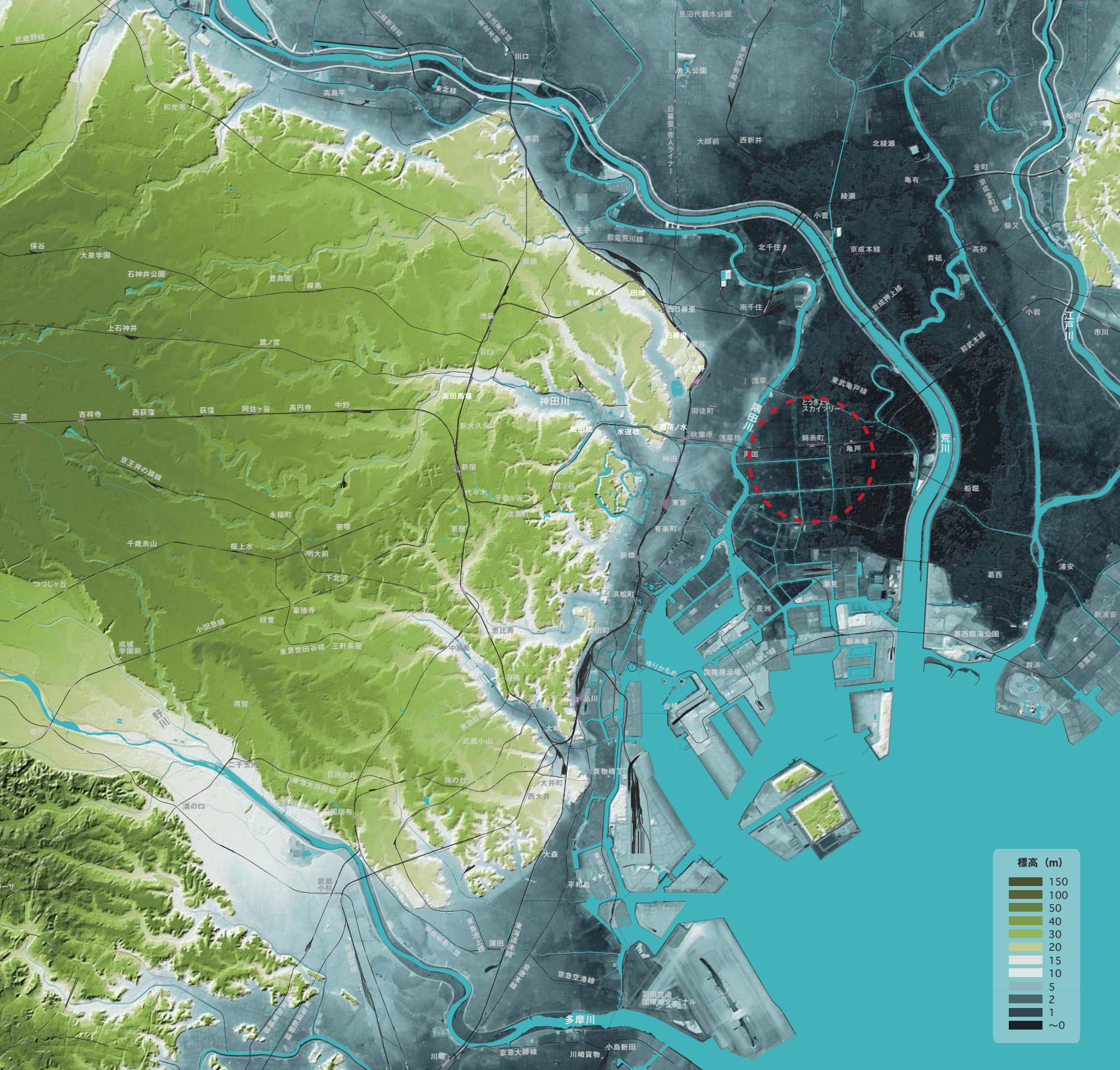


■大正時代 復元断面立面図 1/600 参考文献：伊藤裕久『日本橋からみた水都の基層構造』, 都市史研究, 2017年, より一部筆者トレース・加筆



■現代 提案断面立面図 1/600 出展：筆者作成





業平橋



都市へ流す 水辺再生による流路の形成

18U1102 姉崎 匠 18U1115 川田 優太郎 18U1118 岸 大悟
 18U1130 下平 貴也 18U1150 福地 昂弥

■ 対象敷地 東京都墨田区業平



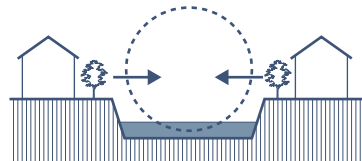
Google Earth

明治時代



http://pds.exblog.jp/pds/1/201407/17/43/f0356843_15384818.jpg

川は生活や仕事の中心であり
住居も川へと向いていた

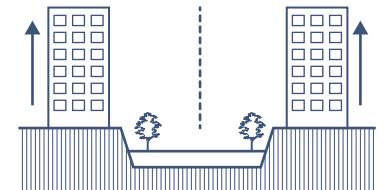


現代



<http://tokyosumida.blog.shinobi.jp/吾妻橋/大横川親水公園>

住居は高層化が進むと同時に
川に背を向けるようになった
川が埋め立てられた現在は
人と川の分断要素となっている

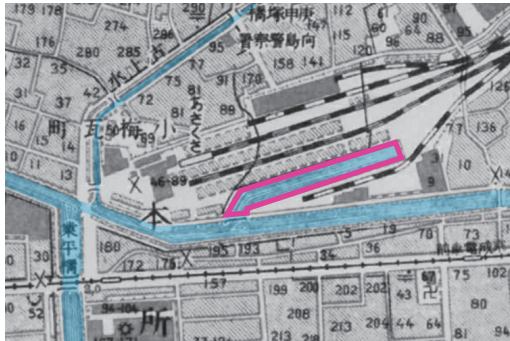




明治期 (1876~1886) 5千分1東京図測量原図

墨田区業平橋・押上地区は、江戸時代初期には草の茂る湿地帯に農地が散在する、江戸の郊外だった。明暦の大火の後、干拓により隅田川以東の市街化が進み、武家屋敷が移設され、町屋建ち並ぶようになる。

現在隅田川と旧中川を結ぶ北十間川は元々、二つの川であった。東側が本来の北十間川で、1659年の本所深川の開発の際に開削され、舟運のほか農業用水としても用いられていた。西側の隅田川と大横川をつなぐ部分は源森川と呼ばれ、材木の運搬を目的として開削された。



1万分1地形図 1916~1921



旧浅草駅ドック <http://www.tokyo-skytreetown.jp/project/history.html>

1902年、東武伊勢崎線吾妻橋駅（現とうきょうスカイツリー駅）開業。その後、浅草駅と名前を変え物流の拠点となった。大正期には北十間川と源森川が繋がり、さらに北十間川から浅草駅構内に水路が引かれドックが作られた。鉄道で運ばれてきた物資は船に積み替えられ、水路を使って各地に運ばれた。

この地域はまさに水と陸の結節点であったと言える。

しかし、その後ドックは埋め立てられ、1978年に北十間川樋門が作られたことで北十間川は分断された。のちに大横川も埋め立てられ、水辺の様相は失われていった。



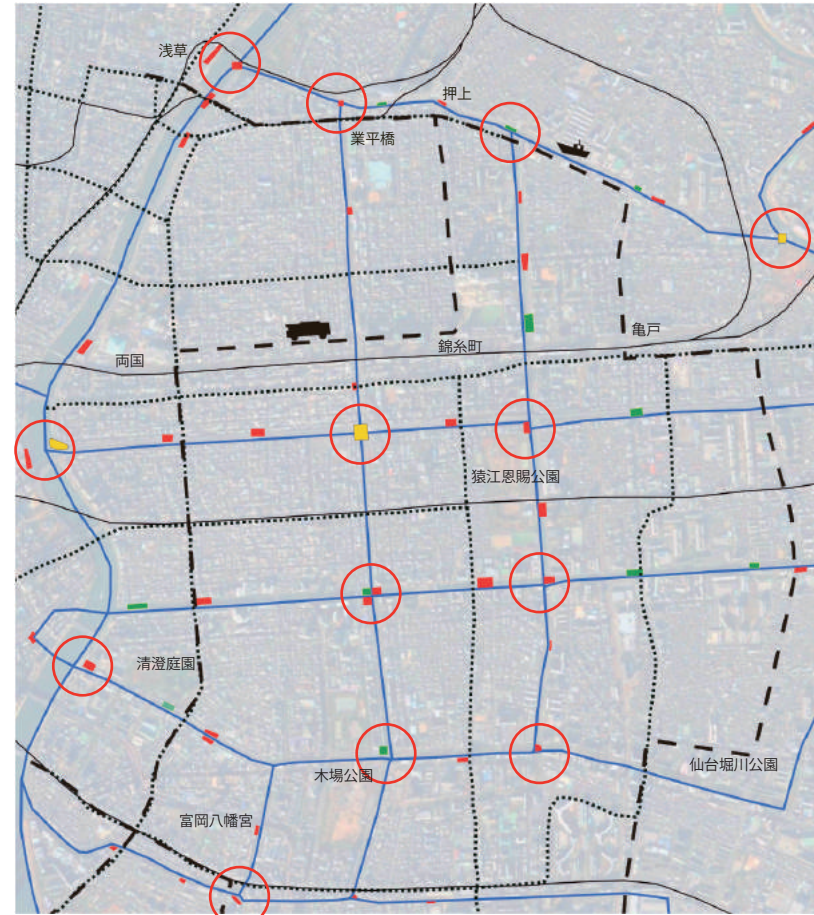
北十間川 スカイツリー前



親水公園 管理事務所付近

近年、旧浅草駅のドック跡周辺は東京スカイツリータウンとして、大横川は親水公園として生まれ変わり、この地域は再び人の集まる空間となった。

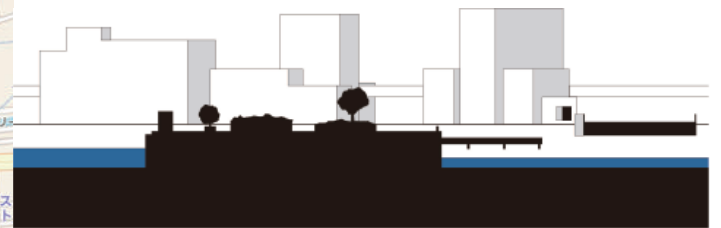
しかしそれらには歴史的なコンテクストを無視した開発も多く、かつての水辺の賑わいや、舟運と陸運を使ったダイナミックな地域ネットワークは見受けられない。



- 路線
- 水上ルート
 - 鉄道
 - 現在のバス路線
 - 昭和初期のバス路線
- 水上バス停留所
- 昭和初期
 - 現在
 - 現在と昭和初期の重複部

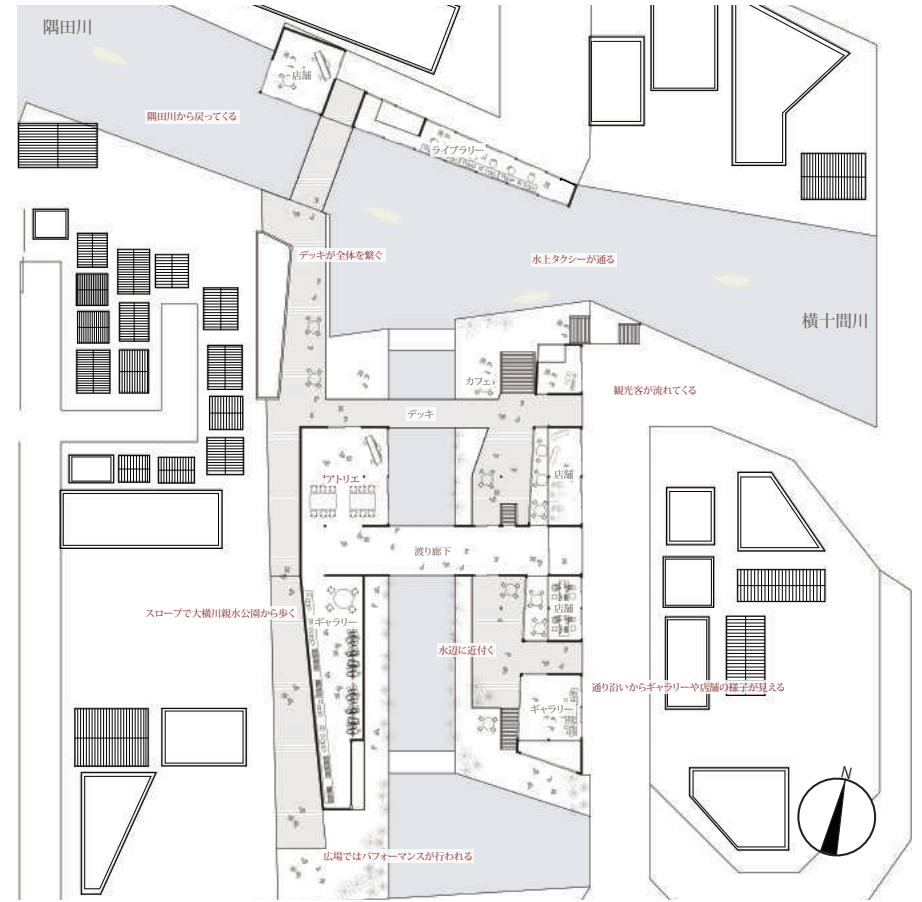
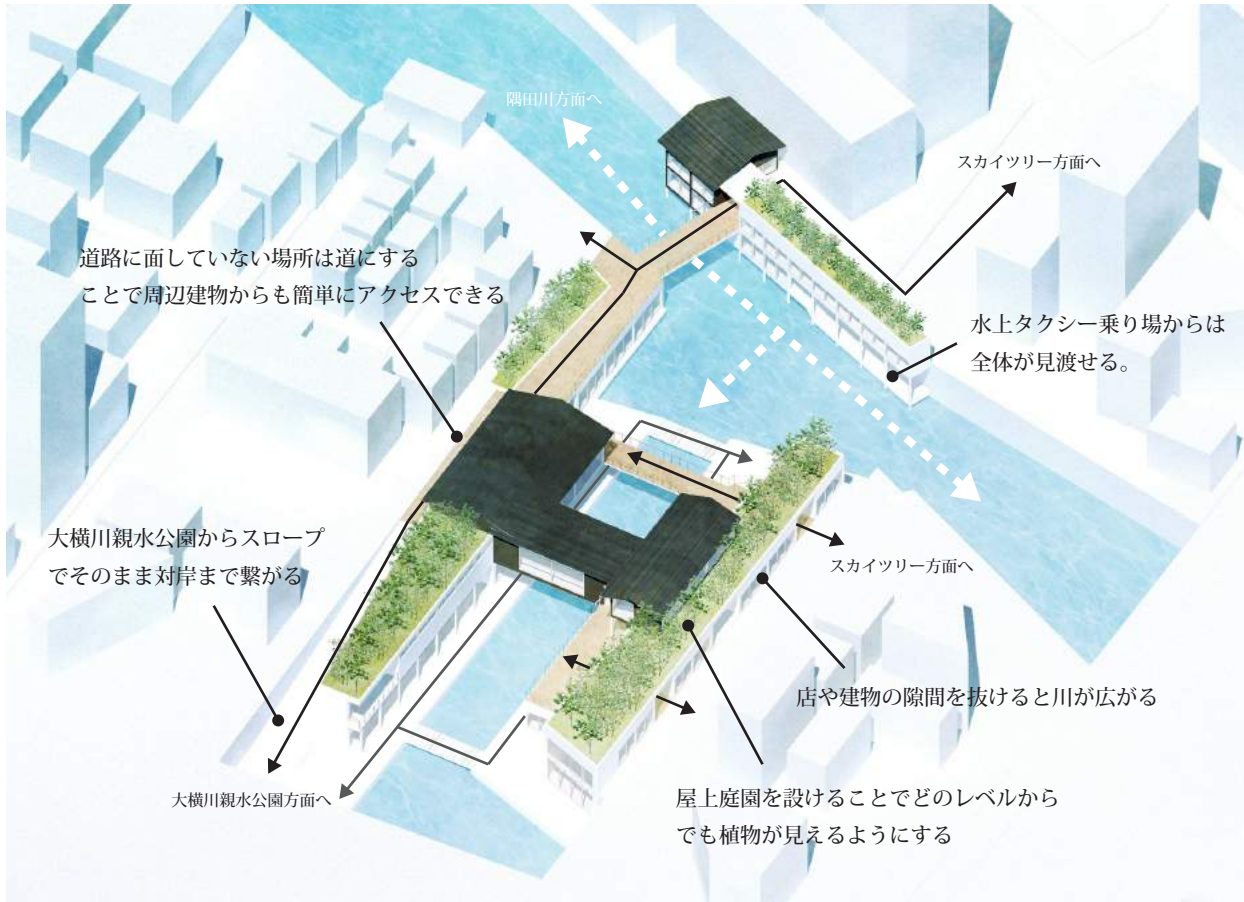
『水の都市 隅田・江東の再生ビジョン Slowater City を目指して』
 (社団法人東京建設業協会都市機能更新研究会 × 法政大学デザイン工学部建築学科陣内秀信研究室) を元に作成

かつて本所深川と呼ばれた地域には、江戸時代に物資を船で運ぶための運河が数多く作られた。運河によるネットワークは近代化以降も維持されており、昭和初期には多くの水上バス停留所の存在が確認できる。戦後に工業化が進み陸上交通が発達していくと、そのネットワークは廃れていった。



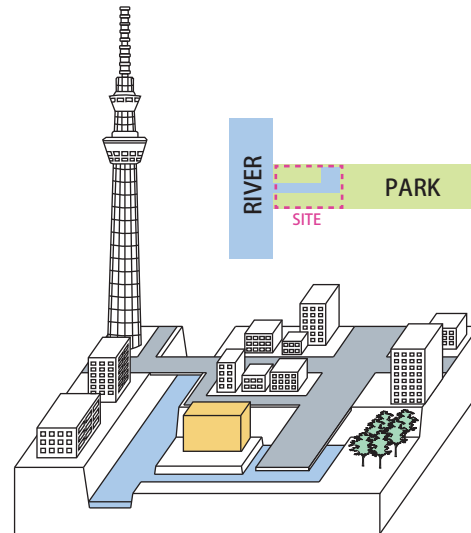
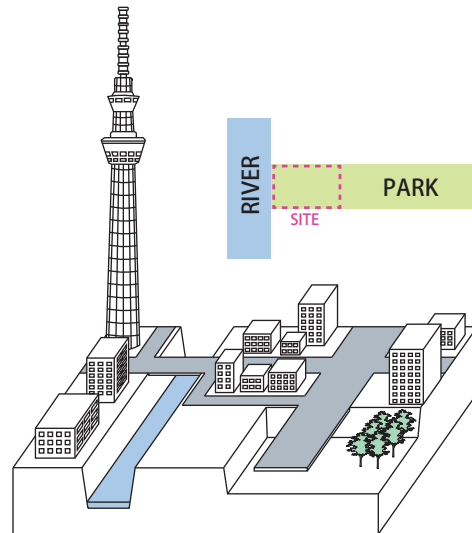
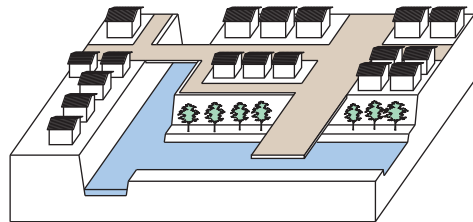
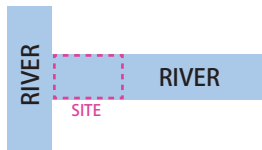
対象敷地に選んだのは墨田区にある東武橋と業平橋に囲まれた部分であり北十間川と大横川親水公園の結末点部分である。もともとは川であり繋がっていたが、現在は樋門があり船の通行はできない。

ここを掘り起こし新たに観光客と地域住民の交わる場所を提案する。さらに水と陸を結びつけ、かつての地域ネットワーク再生を目指す。

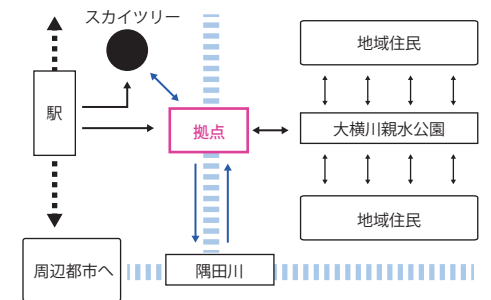


■ 水辺空間の再編

流路
人や水を都市へと流す
路地のような水路



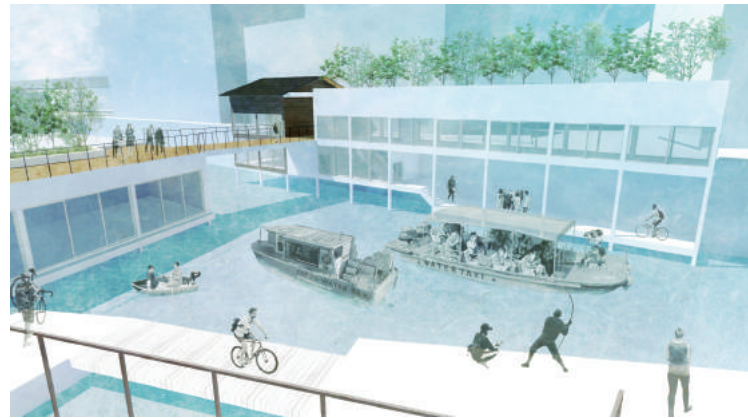
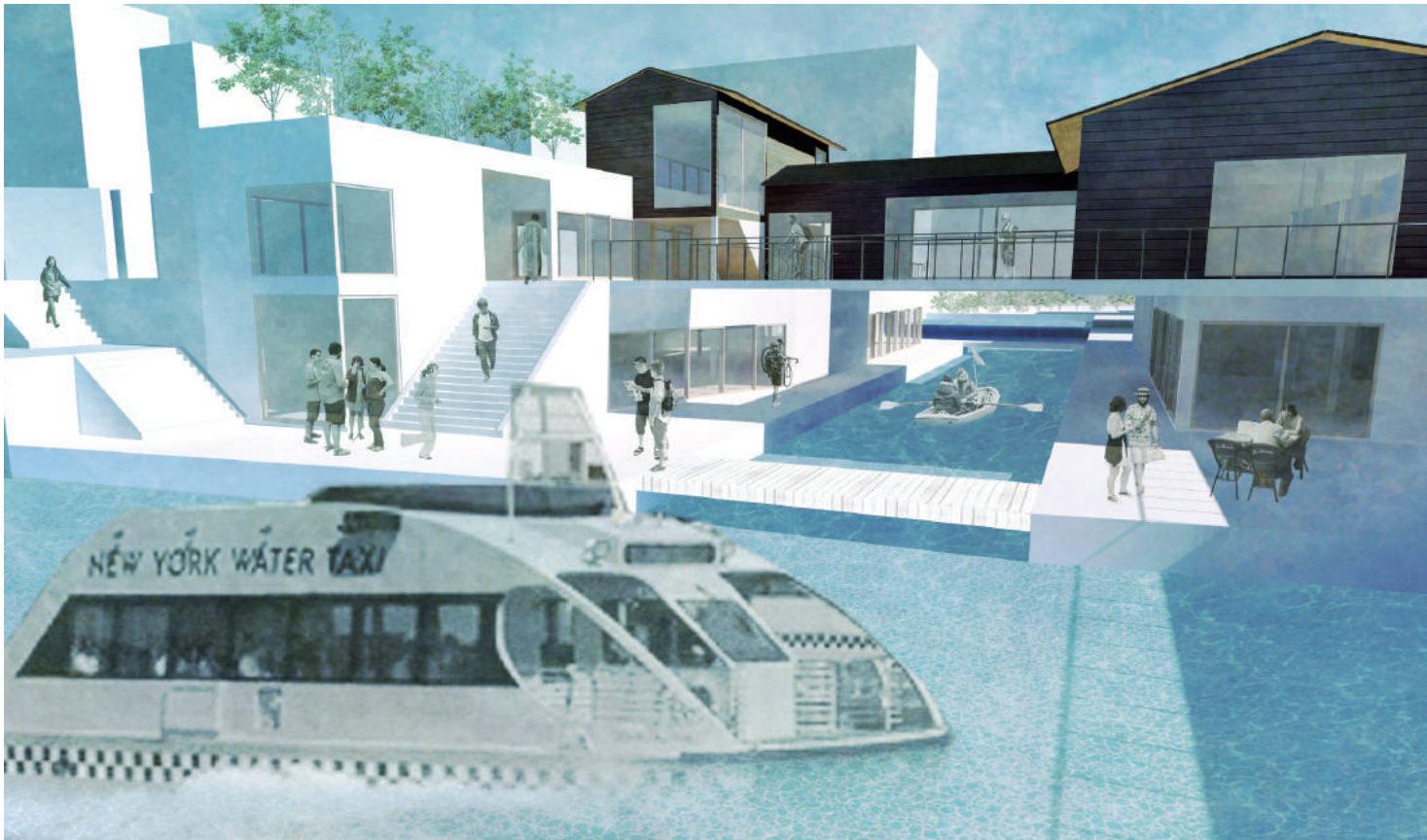
■ 水と陸を繋ぐ



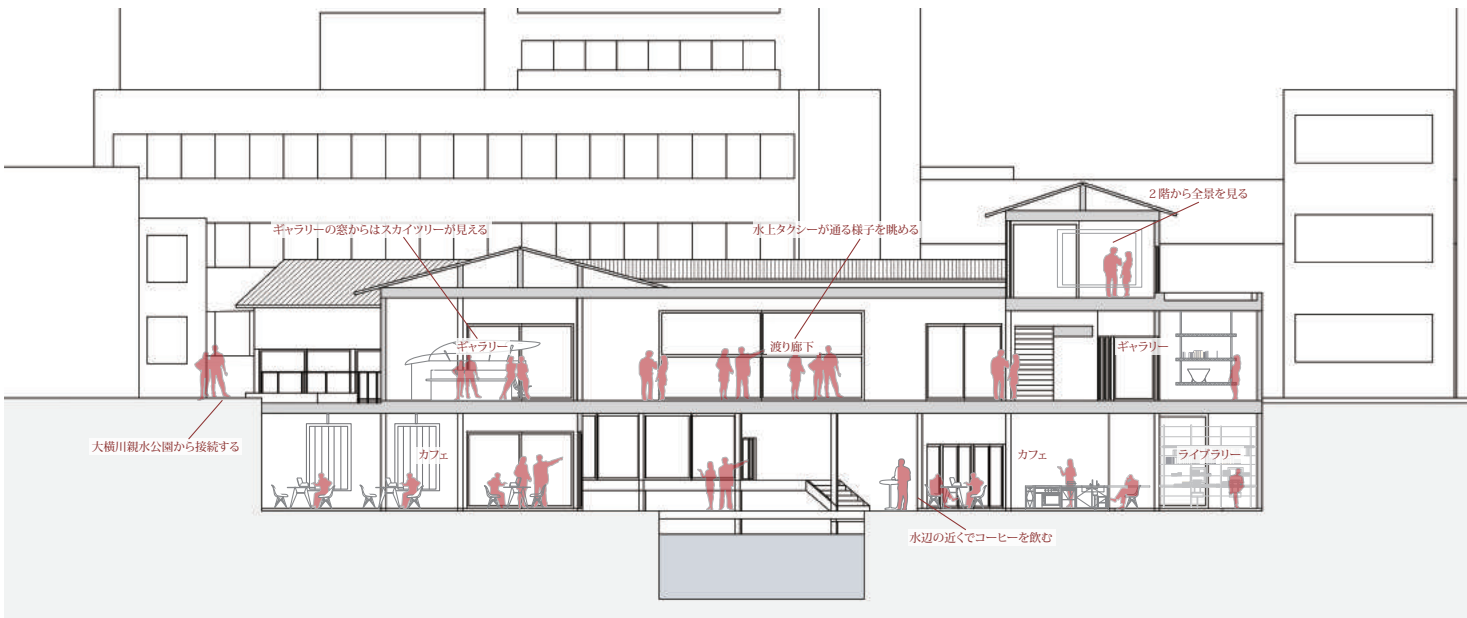
新たな拠点には水上タクシーの発着場所を設計
水辺空間を通して周辺都市と繋がるだけではなく
観光客の流入を促す。またカフェや美術館を計画
することで地域住民の憩いの場所となる。

水と陸を繋ぐ結節点が再編することで
大横川親水公園、及び周辺地域が活性化していく

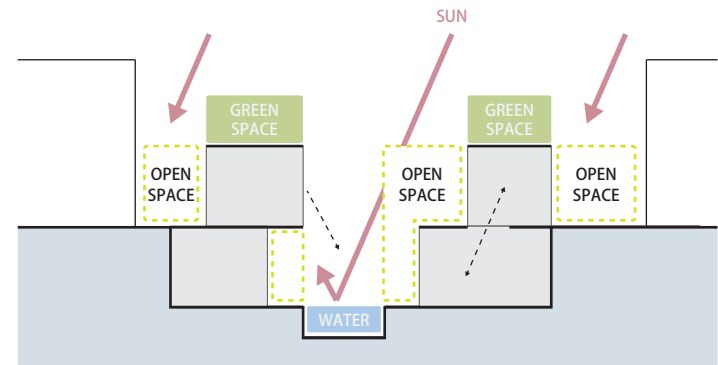
埋め立てられた水辺空間を全て復活させるのではなく、路地のような水辺空間をもった拠点を形成することで新たに都市全体へと人・水・交通・文化を流す



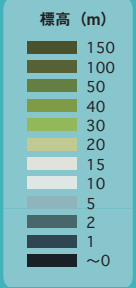
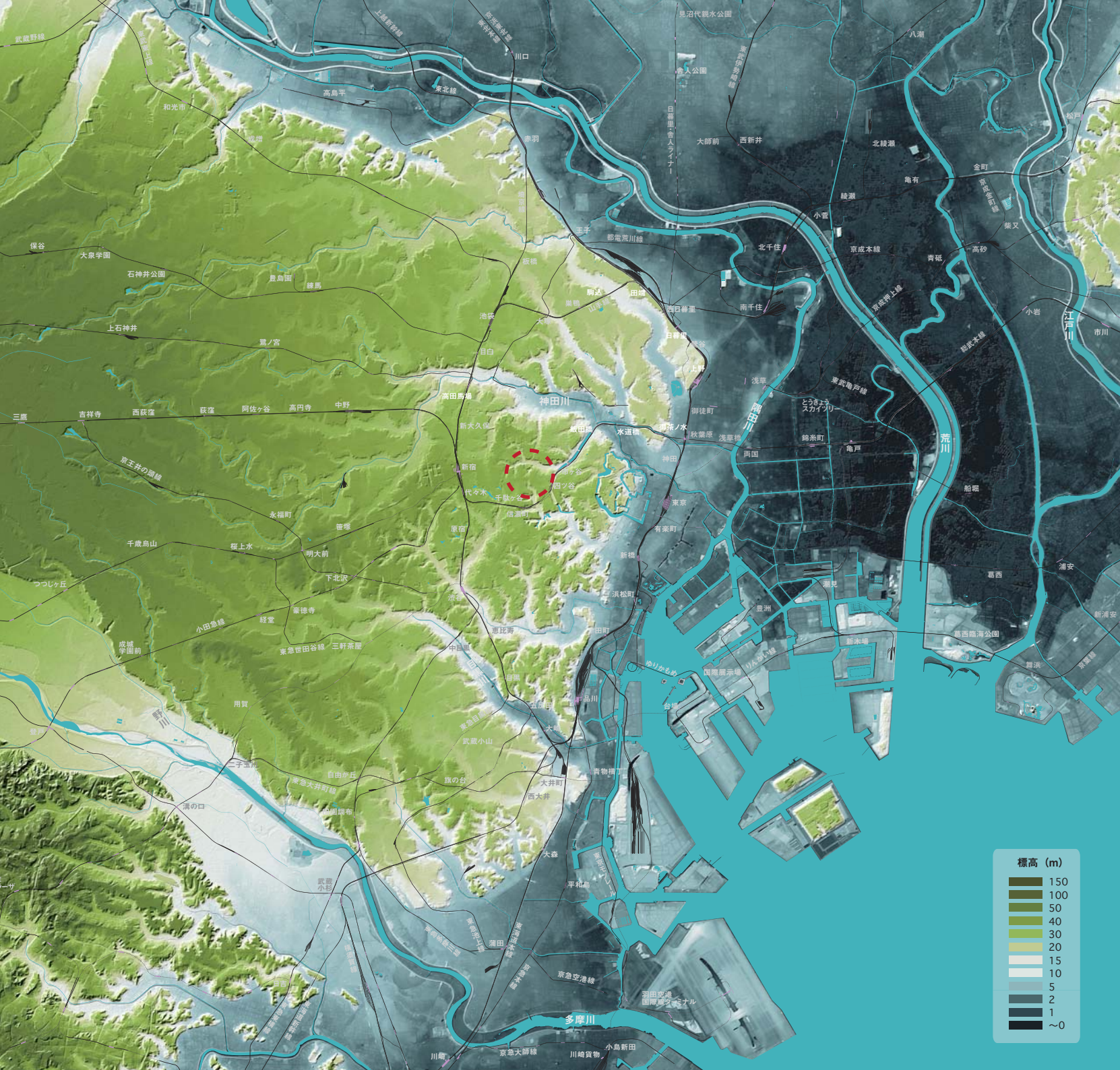
■ 断面図



■ 断面ダイアグラム



道に面した方は水辺側にオープンスペースを設けることで光を下まで通す。隣家に面した方はオープンスペースを設けることで周辺住居にも光を通す。内外の連続と空間のグラデーションによって水辺空間が近くに感じる場所や大きく開かれて見える場所ど空間に多様性がうまれる。また屋上は緑化することで自然が建物を包むような構成になっている。



紅葉川

此処の名は

- 四谷荒木町におけるスリバチ地形再考 -

安達裕紀・稲垣知樹・上田溪・岡崎卓・鐘天博・K=TAKANORI

■ 無個性になっていく荒木町

江戸期

明治期

現代



かつての荒木町は、美濃国高須藩松平摂津守の上屋敷の庭園だった。生い茂る木々と巨大な池、高低差4の滝があり、地形を最大限に生かした庭園であったと言える。

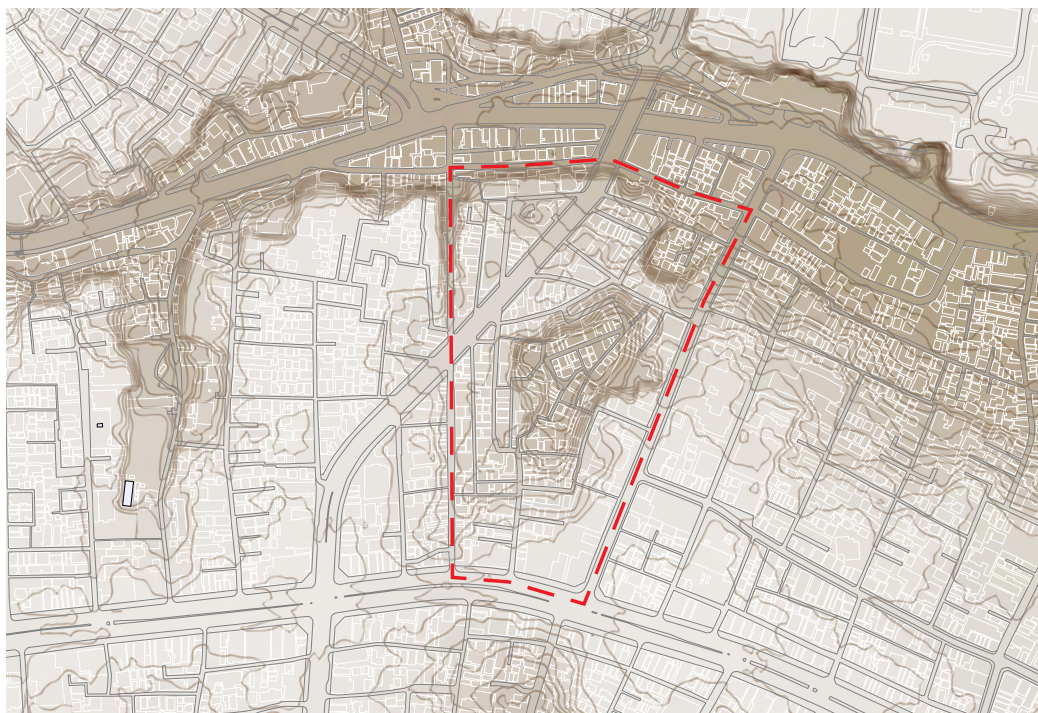
明治6年に東京市によって払い下げられた庭園は都内でも有数の景勝地として人気を集め、多くの観光客が訪れた。それに伴い観光客相手の料亭が出店したことから徐々に花柳界が形成されていった。荒木町の芸者は津の守芸者と呼ばれ気品が高く新橋や赤坂とはまた違った雰囲気を出していた。

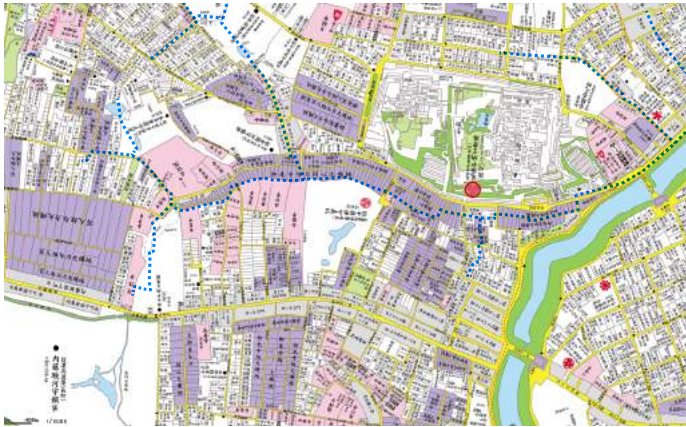
花街として栄えていた荒木町だが、戦後政府の取り締まりによって次々と料亭が閉店していった。しかし大人の街の活気は寂れることなく個人経営のバーや割烹・スナック・小料理屋などが新しく軒を連ねていき現在の飲食街を形成していった。

古くから続く料亭でもリノベーションを繰り返して店の形

は存続したり、継ぐ代がいなくても店の名前をそのまま知り合いに譲ったり、新規の店でも盆踊りや和太鼓の会などのイベントで地域と関わろうとするなど町に愛のある更新の仕方をしている。

■ 表情豊かな起伏



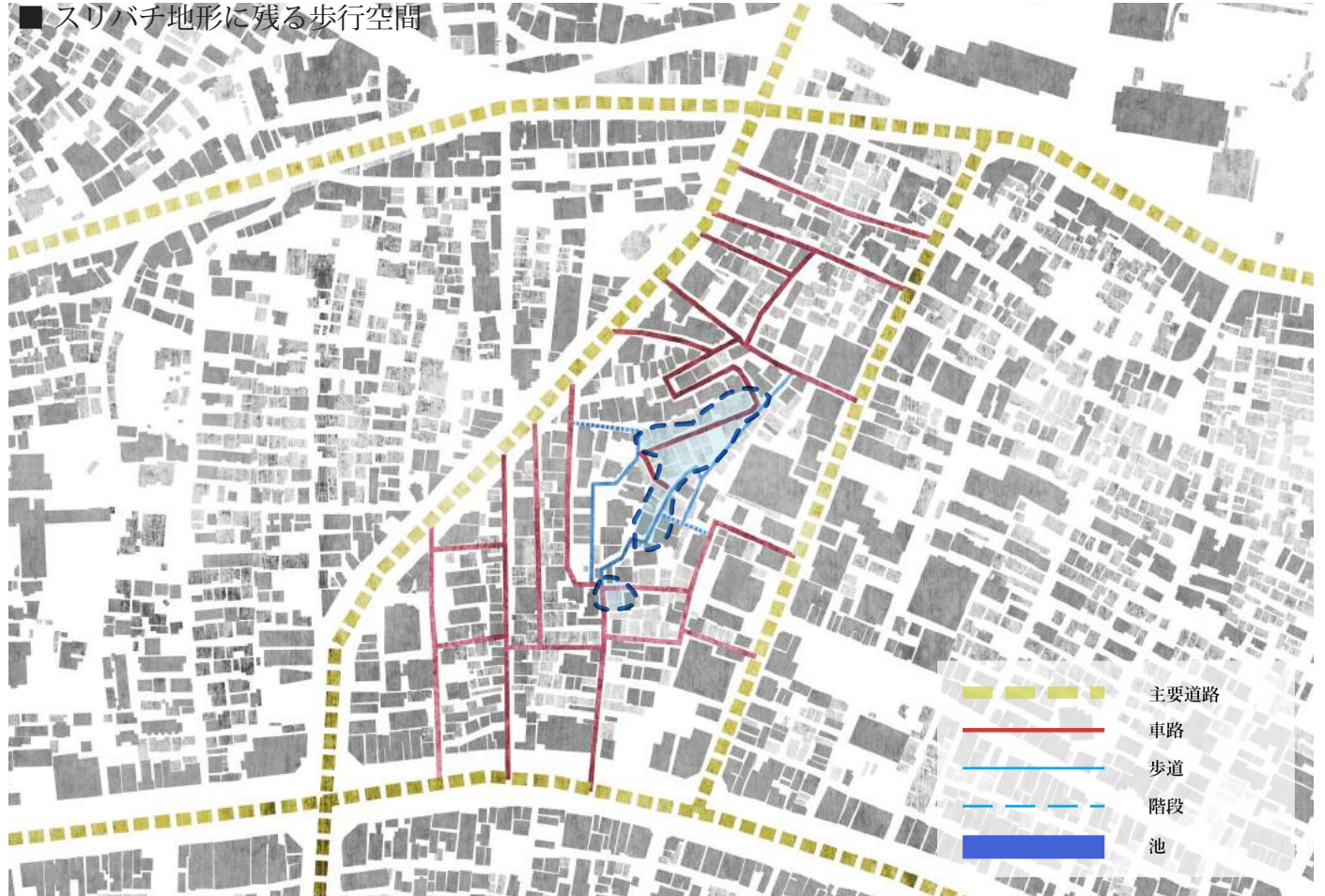


江戸時代地図



現代地図

■ スリバチ地形に残る歩行空間

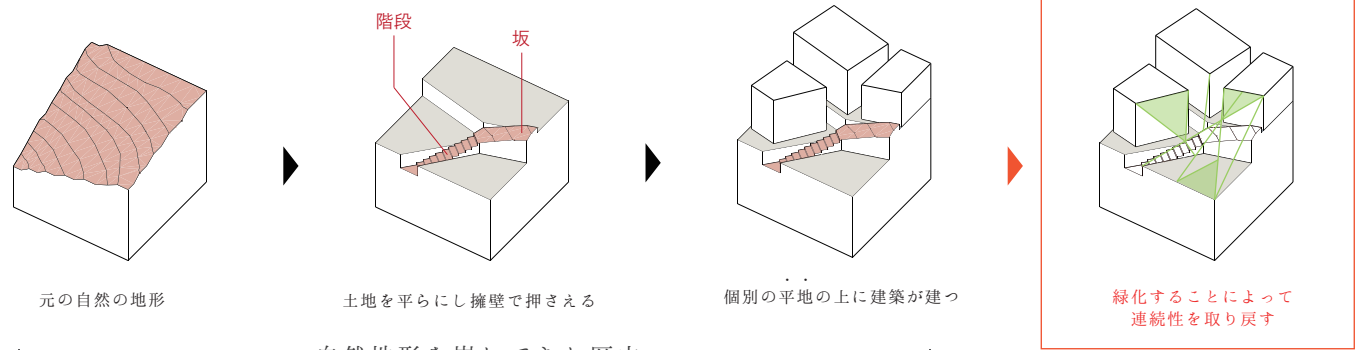


- 主要道路
- 車路
- 歩路
- 階段
- 池

■ 大地を繋げる“緑”



四方が斜面に囲まれた特異なる荒木町の一級スリバチ地形。
『凹凸を楽しむ 東京「スリバチ」地形散歩』/ 皆川典久 / 洋泉社



元の自然の地形 土地を平らにし擁壁で押さえる 個別の平地の上に建築が建つ

自然地形を崩してきた歴史

全体計画



01

-道- 歴史ある石畳を歩む



重い色合いで暗い雰囲気のを歩いて
 楽しくなるような空間にする。
 ゆるやかな石畳の両端のペイプメント
 を剥がし水を流すことによって、少し
 寂しかった道は華やかになる。

02

-擁壁- 都市の緑を支える



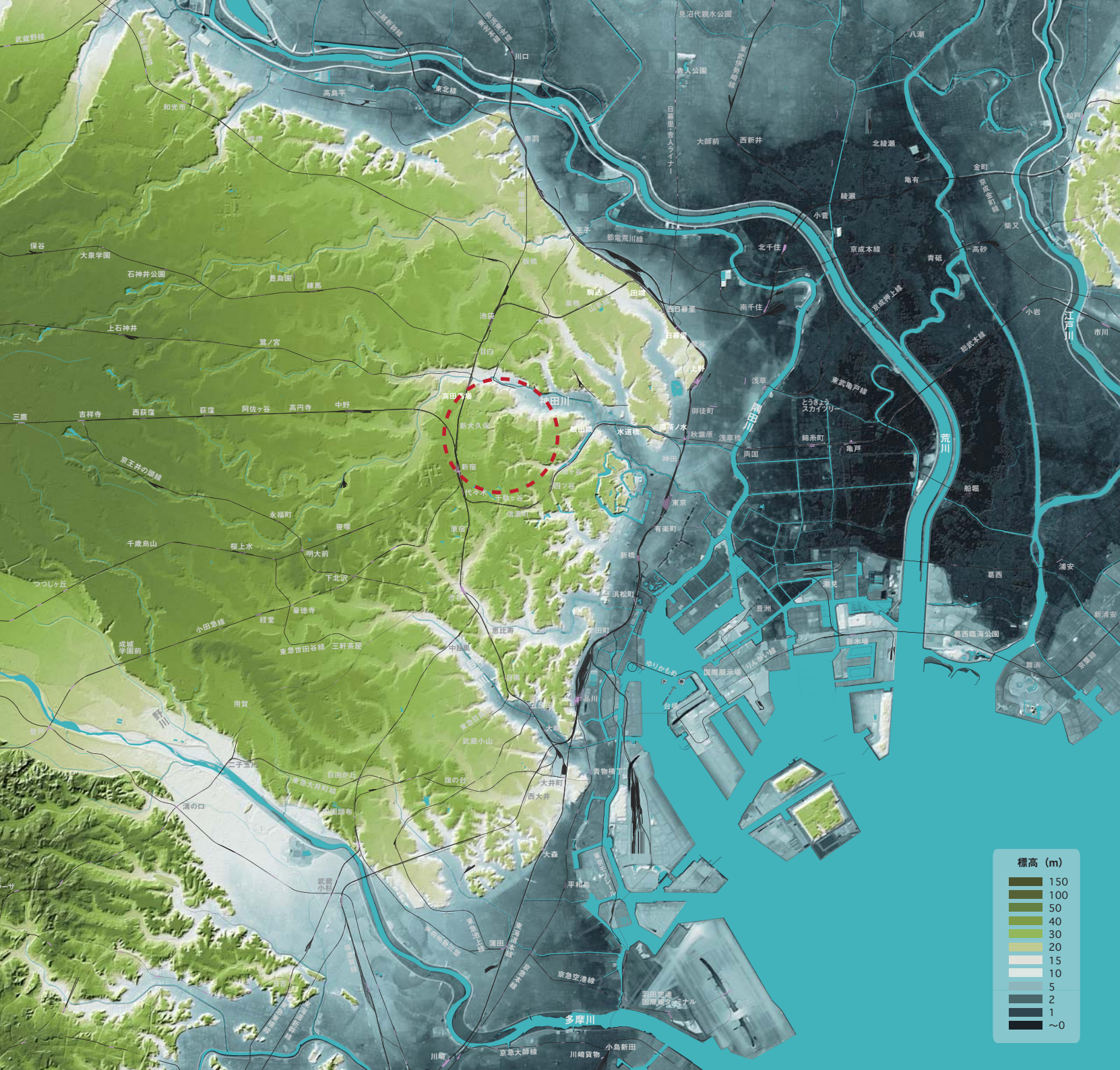
エリアの特徴である擁壁に緑を掛け、
 小さな溜池をつくる。
 都市における自然は子どもたちの溜ま
 り場となり、住民の憩いの場となる。

03

-階段- 水流を再編する



かつて滝のあったところにできた階段
 に水の流れを再編する。
 膜を掛けることによって水と荒木町の
 景色が一体となり、雨で憂鬱な気持ち
 も流れるような歩行空間が生まれる。



蟹川

蟹川

—牛込北方を支えた川—

18U1111 小野寺慧 18U1140 椿進之介
18U1131 徐慧 18U1142 富浦啓太

1.蟹川とは

新宿2丁目の新宿公園の大宗寺辺りを水源として北に向けて流れる川と、歌舞伎町のコマ劇場辺りを水源として東に向けて流れる川とが新宿6丁目の西向天神社周辺で合流し、新宿7丁目、戸山2丁目の戸山ハイツ、穴八幡下を経て鶴巻町を流れていた川。山吹町辺りで弁天町からの流れを合わせ、文京区関口1丁目地先で神田川に注いでいた。

現在は全てが暗渠化されており、川の痕跡を探すことは難しいとされる。



図1 明治19-21年、2018年地形図重ね地図
(『カシミール3D』より作成)

2.地図に見る変化

最も古い時代の地図を見ると嘉永2年(1849年)に描かれた『小日向小石川牛込北辺絵図』及び万延元年(1860年)に描かれた『礪川牛込小日向絵図』に蟹川と思われる川が描かれている。これらを見ると蟹川と江戸川(現在の神田川)に挟まれた地域は「田」と記されており、現在の早稲田地区は多くが田畑となっていた。このため、当時の蟹川は農業用水として人々の生活に利用されていたことが想像できる。

明治に入ってからその構成が大きく変化することはなかったが(図2)、大正時代に入ると早稲田大学の開設とともに早稲田地区の発展が見込まれるようになり、市街地化が進行した(図3)。この際に蟹川の流路が新たに作られた街区に合わせ一部が付け替えられた他、一部が暗渠化した、大半はそのままの形状を残していた。

しかし昭和12年にはほぼすべての箇所が地図上から消失しており、この頃には暗渠化によって川が道路として置き換えられたことが確認できる(図4)。



図2 明治19-21年

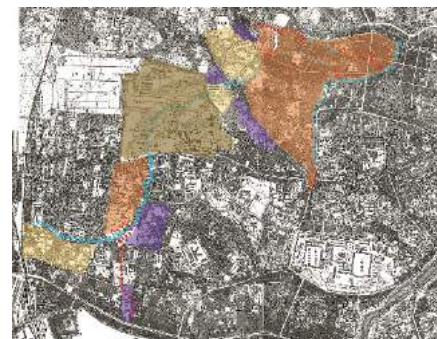


図3 大正10年

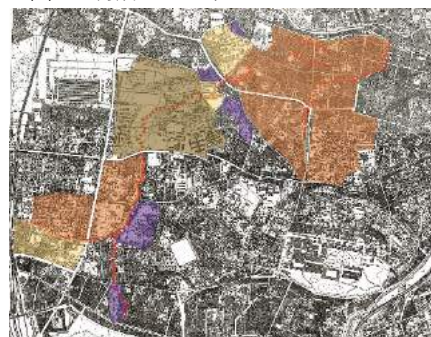


図4 昭和12年

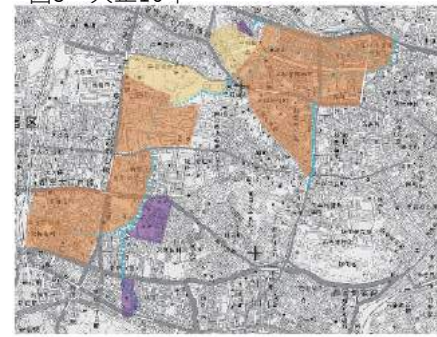


図5 昭和12年

3.フィールドワーク

明治19~21年の東京市街地図を現代地図に重ね、それを手に持ちながら、水源だったといわれる歌舞伎町の繁華街から蟹川の終点だと言える神田川への合流点まで、かつての蟹川の流路を辿った。

暗渠化されたこの川の痕跡を見つけるのが容易ではないが、現在の街区の中にもその影響を受けているとみられる箇所がいくつも見られた。

流路全体を通して歩くにつれて徐々に標高が下がっていき、新宿から早稲田にかけて地形に従って形成されていると実感することができる。一方で、市街地化が進行するとともに造られた複数の幹線道路によってその流れが分断されており、現在の流路沿いのエリアはお互いに断絶した状態にあるといえる。

現在、水源付近は繁華街、中流は住宅街及び教育施設、下流は住宅街と印刷所を始めとした町工場の広がるエリアとなっていることが確認できた。

蟹川復活計画

—川から地域の一体性を取り戻す—



図6 明治19-21年、2018年地形図 重ね地図 (『カシミール3D』より作成)

蟹川は牛込台地北方の谷間を通っており、それに沿って生活環境が形成されていた
しかし、周辺の都市化が進行するとともに暗渠化、その流路が消失したことで都市の骨格であった自然環境を意識できなくなった



近代に近づくにつれて交通の利便化のために幹線道路が建設され、川によって繋がっていた地区は陸橋によって南北に分断され、そのつながりを感じられなくなってきた



かつての蟹川の流路を復活させ、
地域への愛着や固有性を感じさせにくい現在の市街地の中に**親水空間**を創り出す

東京の起伏に富んだ地形の中に生活していることに気付いてもらう

南北にエリアを分断する陸橋

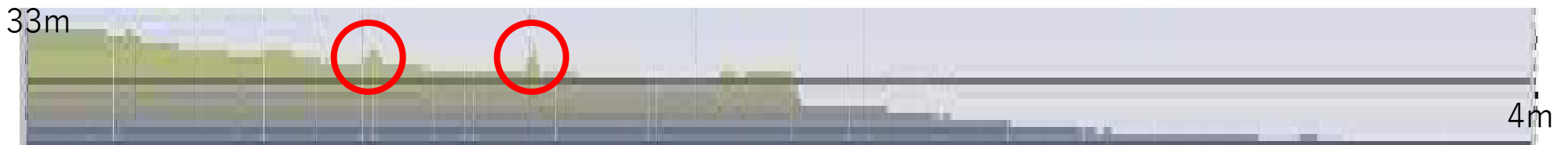


図7 地形断面図 (『カシミール3D』より作成)



①陸橋下を通す

人のスケールよりも大きな陸橋の上は自動車が通り、移動を円滑にしている。しかし、その下の小さな街路は小規模住宅が立ち並び、陸橋の高さのために薄暗い場所となっている。

自動車交通よりも人の通行が多いこのような場所ではわざわざ陸橋を超えずとも往来ができる場所が必要である。

かつて川によって繋がっていた地区を再び川によって接続し、この周辺環境を改善する。

親水空間となる広場と池を新たに計画し、ただの通路としてではなく、地区間のつながりを再認識してもらう。

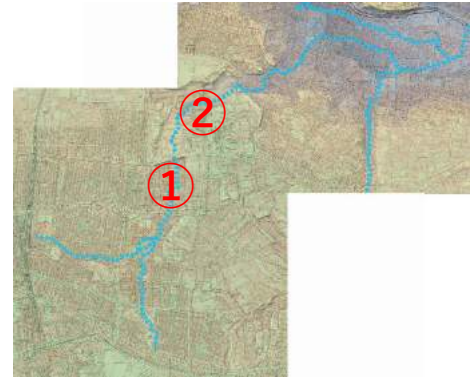


図6 明治19-21年、2018年地形図重ね地図（『カシミール3D』より作成）



②団地の中の緑

かつての蟹川の流路上に立地する戸山ハイツ。今では寂れ、団地の隙間に造られた庭園にも人が寄りついている様子はない。

ここに川とともにコミュニティガーデンを計画し、農作業やガーデニングによって人々の生活の中に彩りを添える。

現在はシャッター街化している団地下層の商店部分をコミュニティガーデン運営のためのスペースとして再生することで、これらの活動を支えていく基盤を作り出す。

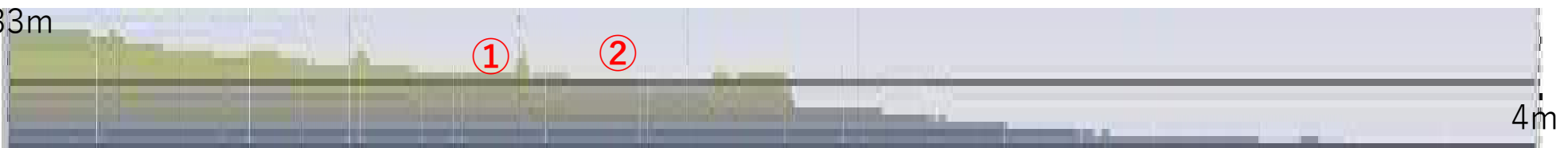


図7 地形断面図（『カシミール3D』より作成）



図6 明治19-21年、2018年地形図
重ね地図（『カシミール3D』より作
成）

③職、住、自然のある暮らし

現在、神田川へと注いでいた河口部に近いエリアには町工場と住宅が混在し、フォークリフトがパレットを運び、その近くでは親子がキャッチボールをする風景が広がっているが、時折一部の工場へ大型車が通行するため、住居が面する道路は空地として十分とは言えない。

川を再生することによって自動車が通行することができない歩行者空間を創り出し、人々の生活が道路にまで広がっていく街路空間へと変貌させる。

街路内の中小企業の物品の輸送には自動車ではなく、フォークリフトによる小規模な移動に限定する。これによって窓ガラスによって区切られた自動車と外部の関係から、隔たりなく気軽な声掛けによるコミュニケーションが可能となる。

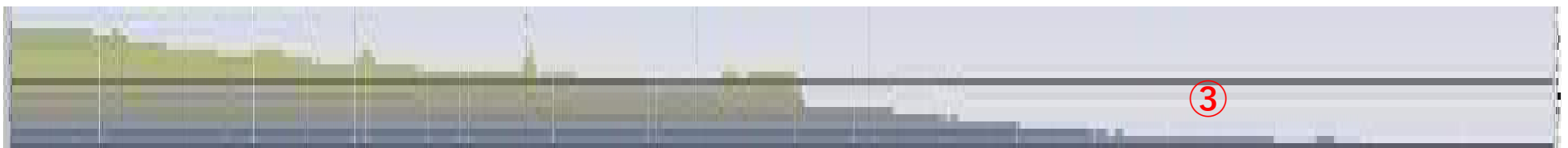
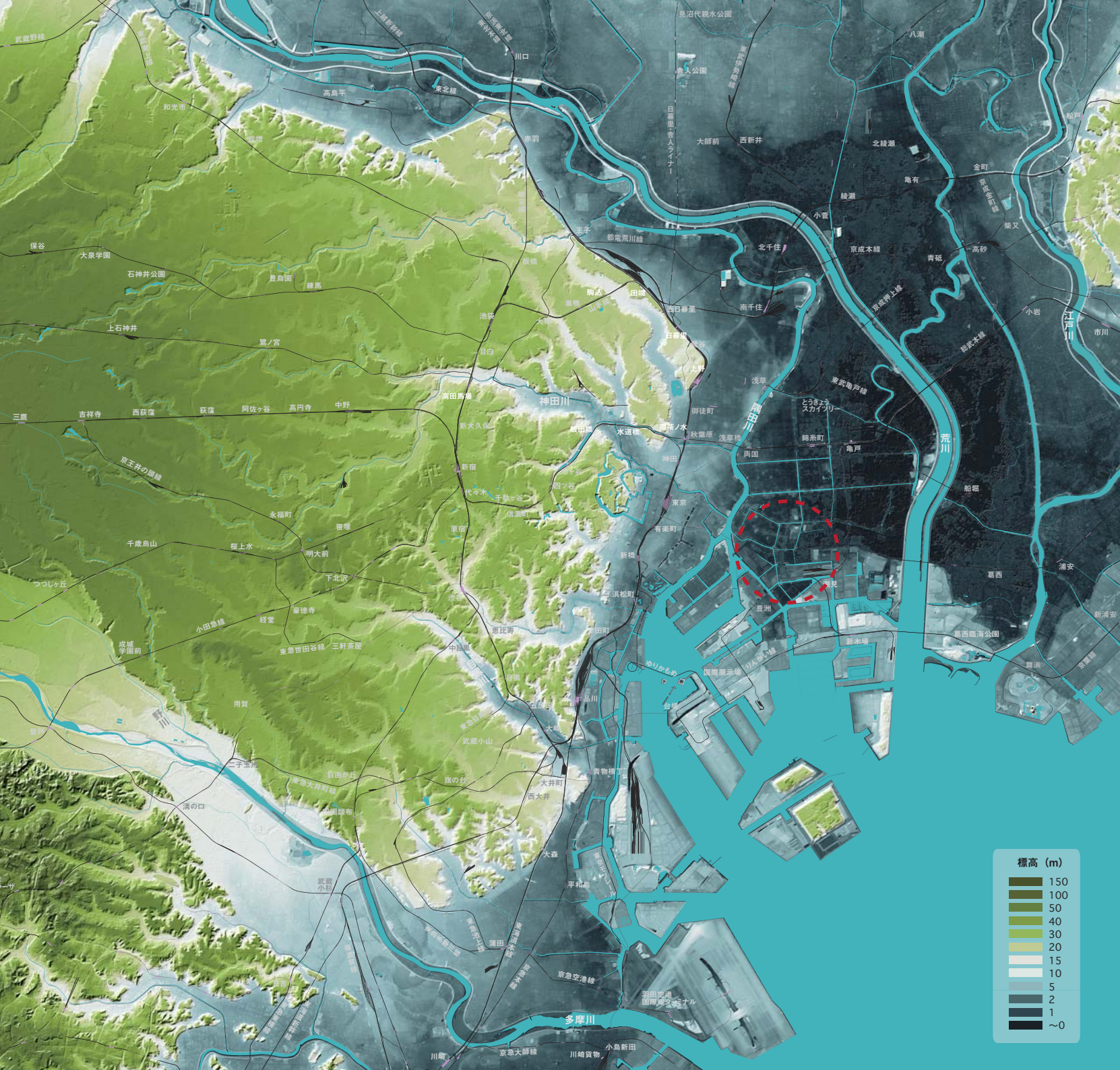


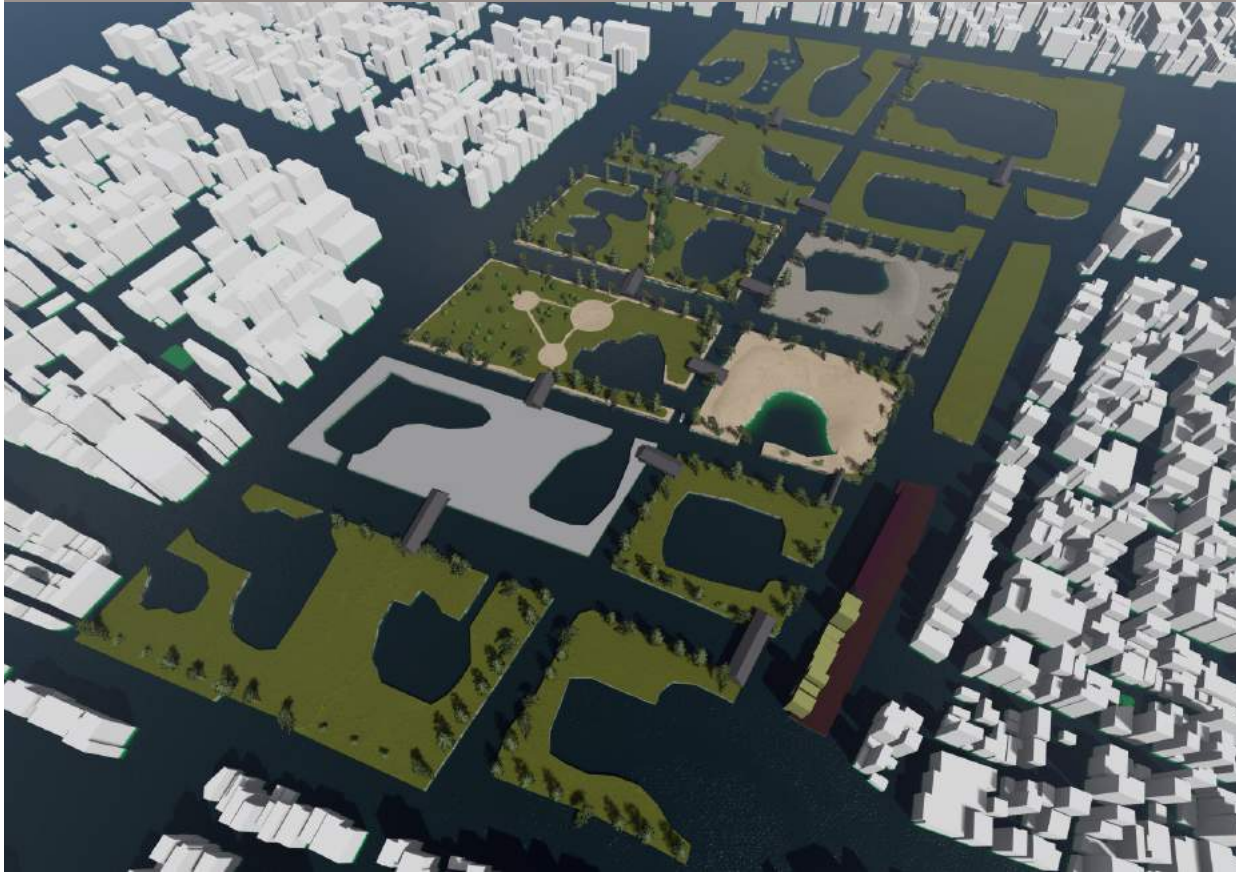
図7 地形断面図（『カシミール3D』より作成）



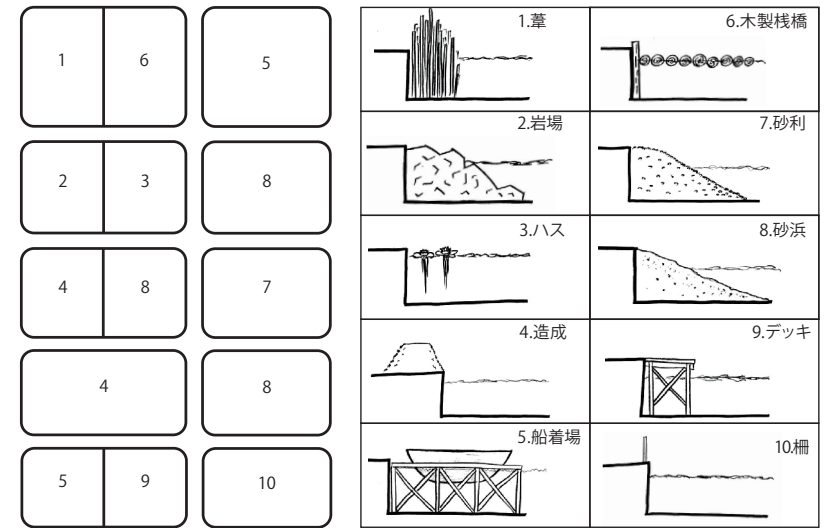
木場

木場入堀の発掘 —境界操作による提案—

高橋 志元 田中 慧 中村 有貴
名島 拓哉 山下 大樹



境界操作による入堀発掘



境界配置

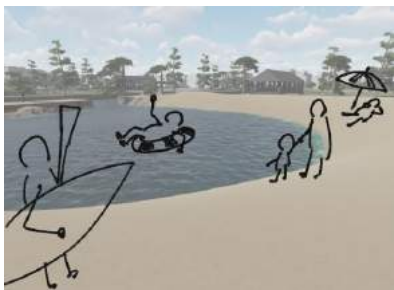
境界操作パターン

木場の空間的特徴は入堀である。歴史的に見ると各入堀は街区毎に明確に水路で区切られ、各個人が私的空間として所有、管理されていた。加えて、木場は埋め立て地であり歴史的に土木操作が行われてきた。これを木場の文脈と捉え土木操作による境界の提案をする。

また、木場は絵図や浮世絵 (P4) を見ると入堀の形状により貯木だけでなく釣り場としても活用されていた。入堀では貯木や釣り等木場の人々の生活における様々な目的が存在した。

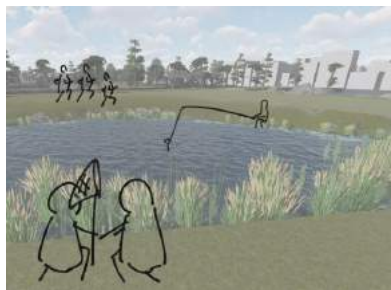
水と陸地の境界において複数の土木操作による境界パターンをつくることで、水と陸地の境界での多様なアクティビティを生み出す。

境界操作によるアクティビティの創出



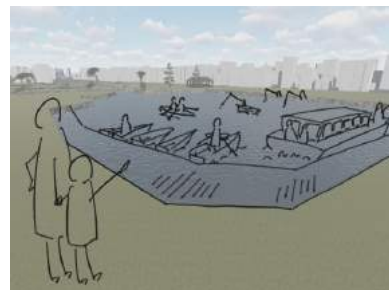
境界操作 砂浜

砂浜で日光浴や散歩をする、水と陸が緩やかに連続し、入堀へのエントランスになる



境界操作 葦

植物による境界操作で水と陸の境界が曖昧になり、人々と自然の繋がりが生まれる



境界操作 船着場

入堀の北東および南西に設けた船着場には、船とともに多くの人々が訪れる

対象敷地



出典：明治東京全図



Google earth より作成

東京都江東区木場周辺における明治9年と現代の比較。明治9年では水路で区切られた入堀が並び、街区の約半分が貯木場として利用されていた。現代は埋め立てられ木場公園になっている。

歴史から見る木場



寛文 11 年図、延宝 8 年図、元禄 13 年図、正徳 3 年図、寛保頃海岸図、明和年中海岸図、江戸の埋立地造成と木場の移転 (著小沢利雄) をもとに筆者作成

木場の歴史

深川木場の周辺は、徳川によって小名木川や十間川など人口河川が開拓された。これらの用水路は材木の運搬だけでなく、木材の貯蓄や乾燥のための下準備、食材や生活必要品の運搬等に、運河として大いに利用された。加えて、深川地域は河川が町中に張り巡らされているという地形的特徴から、隅田川以西で火災が起こった際の避難場所や、武士や商人の別邸の建設地として、彼らの保養や接待の場としても重要な役割を務めた。

木場に集まる木材のうち一般用材は、丸太を筏に組み、主に近隣の県から集められた。(一部、

武蔵野台地で植林され、四ツ谷を経由して江戸に陸運で入荷する、四ツ谷林業と称される林業形態が記録されている。) その後、明治になり鉄道開通による陸運の発展と合わせ、青森材などの東北材も増加した。

水運で集められた木材は、丸太の状態では河川や木材問屋敷地内の水中に貯木された。2.3 年間、水中貯木した木材は、さらに 1.2 年程自然乾燥される。この「水中乾燥」と呼ばれる木材の乾燥手法は、芯材と辺材で乾燥収縮速度が異なり、小口面から繊維平行方向に割れを生じうる木材の特性に対して、先人が発見した有効

的手法である。これによって乾燥させた木材は、自然乾燥、人口乾燥材と比べて品質、香り共に優れているが、現在は費用対効果が見込めないためほとんど見られない。

木場は、江戸の町が爆発的な人口増加で平野一帯が木材枯渇に陥ったことと、幾度の大火に見舞われそれに伴う城下町の再建で木材需要が高騰したことが重なり、材木置き場として栄えた。また、最盛期には吉原に対抗しうる遊郭が存在する土地としての評判も高く、材木置き場としての急速な発展と、大火や商売の失敗での滑落からくる「栄枯盛衰」の感性が、当時の深川市民

木場の由来と材木置き場の変遷

東京都江東区の「木場」という地名は、この地域が江戸時代に建設資材の材木置き場だったことが由来している。木場は、昭和初期に材木置き場が新木場へと移転されるまで、1700 年頃から日本最大の材木置き場としてその役割を果たした。

起源は、1590 年徳川家康が江戸に入り、江戸城改修事業を行ったことに始まる。その際、建築用木材の流通のため地方から招集された材木商の一部が、改修工事後も江戸に留まり、1606 年日本橋材木町で江戸最初の材木業が起こった。その時、町中にある材木の高積みが数度の大火が拡大する原因になったとされ、日本橋から長代島、猿江、現在の木場と、材木置き場が移った。

木場年表

1590	徳川家康が江戸入り 家康の命により舟道の開削や江東湿地の開発が開始
1603	江戸に幕府が開かれ、深川で海洲の埋め立て工事が開始
1629	漁師達が幕府に干潟を宅地化する造成願いを出す
1641	江戸大火、材木場が日本橋から長代島(現佐賀町近辺)に移される
1657	明暦の大火をきっかけに江東地区の開発進行
1659	同時期に堅川や大横川、十間川等の河川が開通
1690	江戸市中の材木商が、それまで材木を集中管理する場所であった木場に移住
1699	幕府が木場を御用地として召し上げ、猿江を木場の代替地とする
1701	猿江木置場の商人が土地を返上 現在の旧木場周辺に移り自力で土地の造成を行う。この土地が深川木場の起源となる、以降「木場」として定着

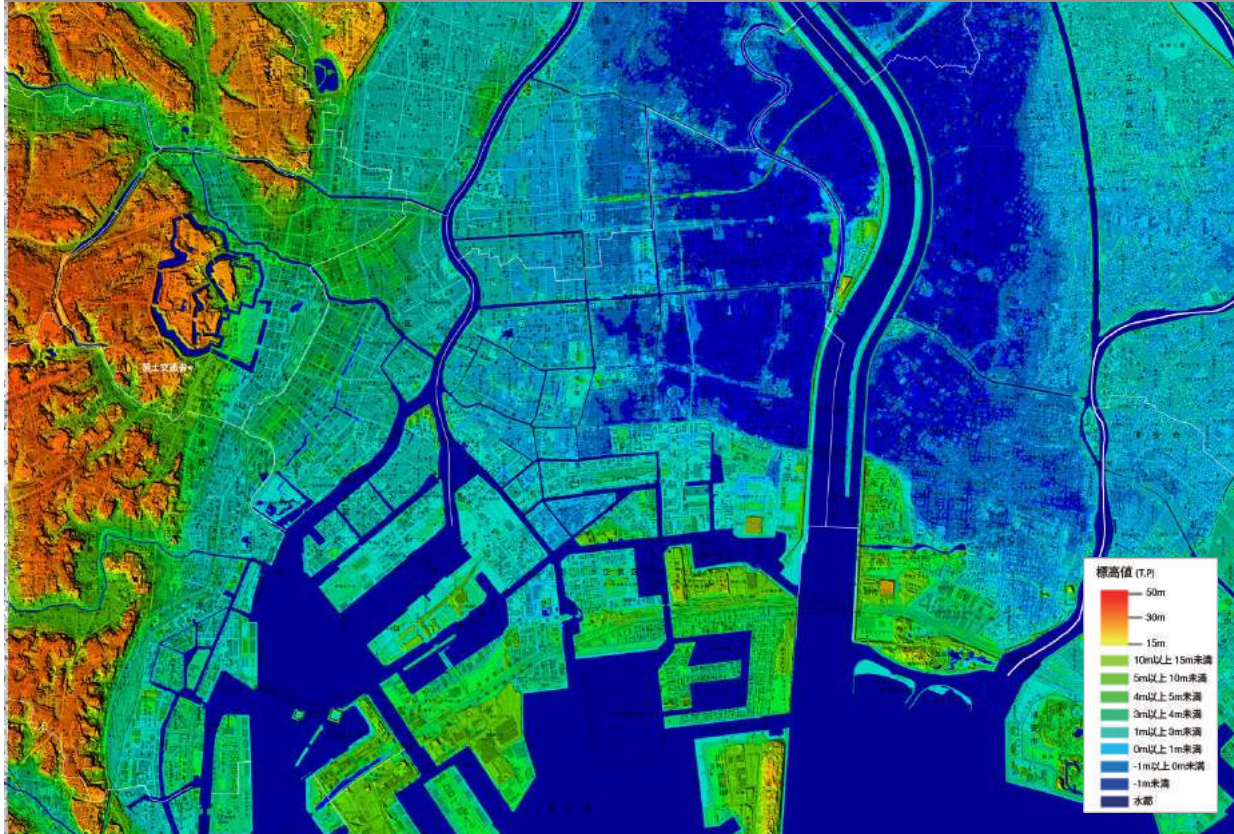
木場二丁目 高架下



筆者撮影

木場駅西側には河川が流れていた名残がある。かつてこの地を流れていた河川は駐輪場となり、現在の人々の生活のための新たな役割を担っている。

地形から見る木場



出典：国土交通省国土地理院デジタル標高地形図

「干拓」と「浚渫」について

木場の地形的要因となる埋立事業には「干拓」、水路や入堀を管理するには「浚渫」が必要不可欠であり、これらは日常的に木場の人々の生活に関わっている。はじめに江戸当時の一般的な干拓方法を以下に示す。

- ①新しい海岸線位置を決め、干潮時に木杭を打込み、竹や木などを編み込んだ柵（しがらみ）をたてる。（潮汐時に排水可能な門を設ける。）
- ②潮汐で柵に堆積する土砂も利用し、柵より陸地側に石垣を積み上げる。
- ③排水用門を除く海岸線の全てに石垣を組む。大潮の干潮時に大人数で一斉に排水用門を閉

じ、柵から陸側への水を防ぐ。

- ④柵で囲った範囲に、江戸市街から出た塵芥や、浚渫により出た土砂を堆積させ陸地を作る。つぎに、浚渫とは水中の堆積物を取り除く作業である。木場のように流れの緩やかな水路には土砂が堆積しやすく、これは運搬船の進行を妨げ、生計に直接的な大打撃となる。したがって、浚渫は日常的に行われ、それは水路の管理や所有という意味でも重要であった。浚渫には莫大な資金や労働力が不可欠であり、基本的にはその水路に面する土地の所有者（木材問屋）が浚渫を含めその水路を管理した。これを自分

浚と呼称する。自分浚に対して幕府が利用する水路に関しては、特別に浚渫の人手や管理費用を負担することもあった。このことを公儀浚と呼称する。

最後に浚渫は規模で2種類に分けられる。

- (1) 浚船で鋤鎌という道具を用いて恒常的に行われる「定（常）浚」
- (2) 水路を締め切り土砂を浚う およそ340年ごとの「川浚普請」

浚渫によって集った土砂は、干拓や河岸の拡大に用いられた。

木場の地形的特徴



出典：東京一目新図

江戸当時、木場は浅草川（現隅田川）の河口に位置し、土砂が堆積して形成された遠浅な湿地帯からなっていた。爆発的な人口増加による土地の確保とそれに伴い発生する廃棄物の処理のため、幕府は継続的な埋立事業を始めた。それは明治や昭和へと続き、現在（左図）の地形となっている。（江戸中期の湿地帯の南端部、海と陸との境界に洲崎神社がある）木材の運送、水中乾燥や貯木のため、街区ごとに水路を張り巡らせ、自らの敷地に水路を引き込むよう入堀をつくった。入堀はその街区の陸地と同程度またはそれ以上の面積だった。このような格子状の水路と各街区に設けられた入堀、その密度の高さが材木置場の効率化を最大限に反映させた土地利用が木場最大の地形的特徴であると言える。

木場親水公園



筆者撮影

木場親水公園には木場で働く「川並」と呼ばれる筏師（いかだし）の像がある。川並たちが材木を操るときに互いの息を合わせるために歌った労働歌が「木場の木遣」となり、また材木を鳶口で操る技が「木場の角乗」として今日まで伝えられている。

洲崎神社



筆者撮影

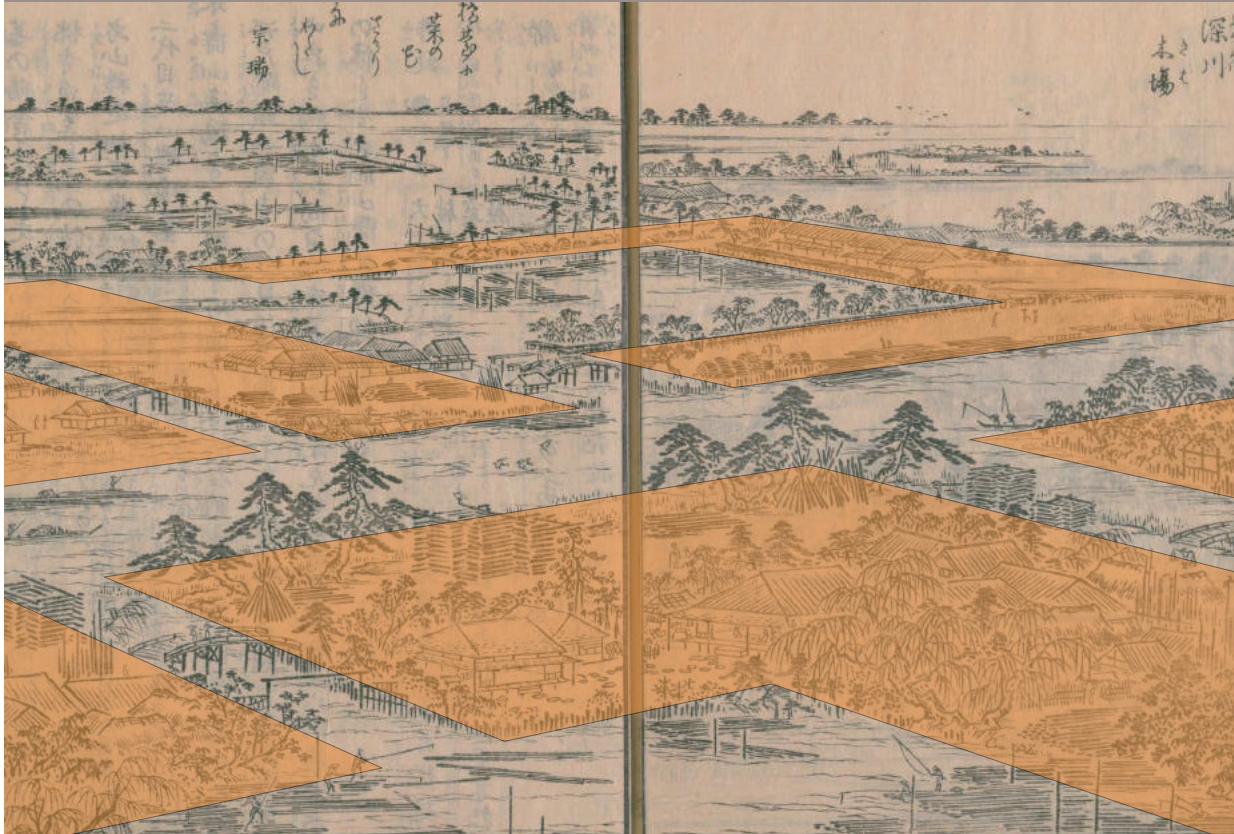
木場公園



筆者撮影

木場公園は仙台堀川をはさみ南北に跨がる都市公園である。この公園の計画区域のほとんどは、公園事業に先立って始まった木材関連企業の「新木場」地区への移転跡地である。

絵図から見る木場



江戸名所図会「深川木場」より筆者作成

江戸名所図会の考察

左図は、「江戸名所図会7巻18冊『深川木場』」をもとに、2消失点パースで陸地を取り出し作成した。

陸地間に水路が基盤目状に走り、各材木問屋所有の矩形の敷地中央には入堀があり、丸太の水中貯木に利用される。描かれた方角は判別できないが、材木置き場として活用するために湿地を開拓された、「木場」の特徴的な入堀の形が表現されている。

絵図手前の陸地には、材木問屋と彼らの家屋と思われる寄棟の木造建築が20棟程度確認できる。また、その周辺に乾燥もしくは保管中の材木が横たわり、陸地を囲むように松などの木々が植林されている。

陸地外側の水路は、水中貯木されている丸太が多数確認でき、丸太の上に立つ人と釣りをする人々の様子が描かれている。比較的幅の狭い水域(同一材木問屋の敷地と思われる)には、低ライズ扁平アーチ型の木造橋が描かれ、地面と水面の高低差は、この絵図から正確に判断できない。水と陸の境界部にある縦線からは、木杭が打ち込まれ陸地と水辺を隔てていることが推測できる。(前項で解説した干拓と浚渫。)

木場



出典：東都花暦十景 木場ノ魚釣

釣り堀としての利用もされているかは不明だが、釣りを楽しむ子供が描かれている。また、絵図中央部には、貯木乾燥中の放置された木材、絵図奥には、船の帆と思われる木材が表現されている。

木挽き職人と木場



出典：三十二番職人歌合

製材用縦引きノコとして、オガ(大鋸)が室町時代初期-中期ごろに出現し、さらに一人挽きのマエビキ(マエビキオガ)が使用されることになって、従来の打割り式製材が改められた。これは大きな技術革新で木材の利用範囲が急速に拡大した。

オガやマエビキが普及するにつれて、オガ挽き、あるいは木挽きという専門の製材工人が現れ柱材や板材の見込み生産が一般化した。これにより、不特定の木材需要に対してのいわば商品生産が開始され、商品としての材木の取引・販売の進行とともに市場規格が慣習の中から決まってくるようになった。

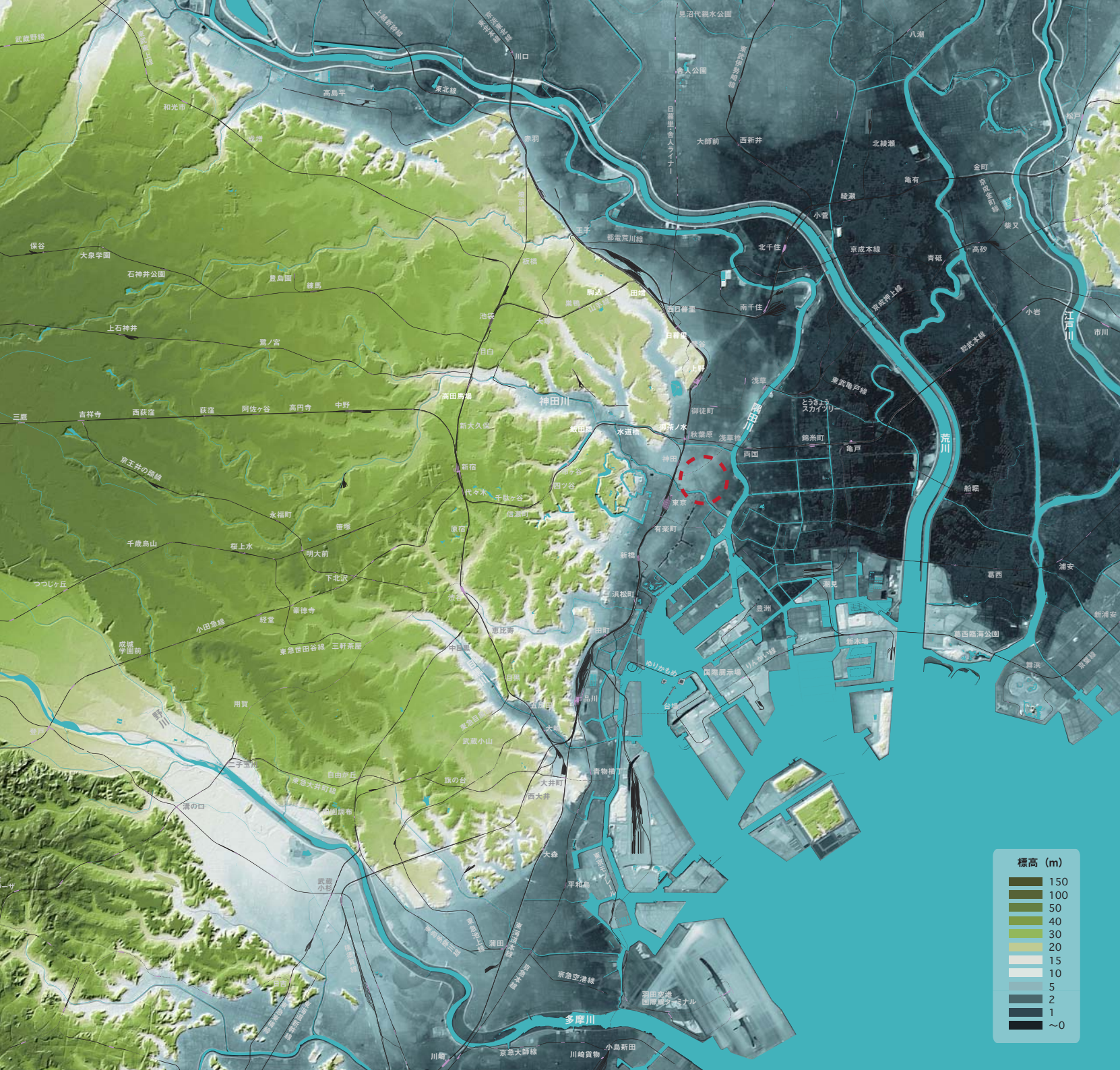
絵図における水と陸の「境界」



出典：江戸名所図会 本所一目弁財天深川八幡御旅所



出典：江戸名所図会 小名木川五本松



東堀留川

東堀留川周辺の 橋の歴史と変遷

親仁橋

当時旧吉原の西側にあった東堀留川には橋が架かっておらず交通の便が悪かったため、元吉原の創設者である甚右衛門が幕府に願い出て、橋を架けたことから、**親仁橋**と名づけられた。

江戸時代、親仁橋の西側は問屋が建ち並び、東側は歌舞伎町として栄えた。商業の空間と芸能・文化の空間の境にあったのが親仁橋で、江戸切絵図からも読み取れるように、様々な業種や目的を持った人が行きかう場所であった。

昭和初期（親仁橋）



現代



■ 蘇らせる水域

■ 現在の水域



萬橋

東堀留川の河岸には、様々な物資が流れ込んでいるため、萬橋のすぐ東側の煙草河岸を除いては、魚河岸や米河岸などの河岸名はなく、西側を西方河岸、東側を東方河岸と名付けられていた。

昭和中期（東堀留川）



思案橋

思案橋は、吉原にいかか思案する場所という意味で名付けられた。親仁橋を直進すると、歌舞伎町を過ぎて吉原の大門に行き着くが、親仁橋が思案橋と名付けられなかった理由には、わざと裏まわって行くようなルートが吉原へむかう人々の間での暗黙の了解であったという説もある。

吉原がひけて以降、吉原町地区は、水天宮が建てられたこともあり、明治期まで商店街として機能する。

東堀留川の入り口にあたる場所にあるが、その周辺には、地方へお参りに行く人々も多くいたという河岸の影響か、神社が多く存在する。

昭和初期（思案橋）



現代



「東堀留川」周辺調査結果と提案

* Member * 加藤圭 國松千裕 鈴木万里奈
吉田功樹 渡辺智也

「堀留」の消滅

火事の多い江戸にあって奇跡的に火事から縁遠い場所であった堀留町も、時代の流れとともに変化を迎える。昭和3年（1928）に発生した関東大震災後、復興の妨げとなった瓦礫処理による埋め立てで、西堀留川が先に埋め立てられ、その前例から昭和26年（1951）戦災瓦礫処理で東堀留川が埋め立てられ、その姿を消した。東堀留川は、帝都復興事業により萬橋から北側の掘割104mの区画はすでに埋め立ており、残りの大半が、敗戦後の戦災残土処理により昭和24年から1年5か月かけて埋め立てられた。

東堀留川に架かる萬橋以北は公園用地として確保され、萬橋以南が住宅造成地として売却対象の敷地となった。基本的には、掘割と河岸の境界を背割り線とし、南北に東堀留川跡地の中央に道を通した。その道から土地を振り分けるように短冊状に敷地割りがなされた。敷地規模はほぼ均等で、間口5間、約30坪が基本であった。掘割の両側に河岸地を持つ空間は、河岸の陸側に公道があり、河岸の土地を利用する人たちはその道がメインアプローチとなる。

萬橋の部分は、東西からの道の幅を保持するように繋いだことから、公園予定地と宅地の一部が削られ、共同三揚場の土地は日本橋保健所となる。公園は東西側が河岸地としてそのまま残ったことから河岸地の一部も公園用地として確保した。また、日本橋保健所の建て替えでは新しいビルが敷地いっぱいに入ったために、一階部分を公道から公園にアプローチできるように開放的な空間を創出する工夫がなされた。

土地の少輔形態がわかる昭和20年代に作成された火災保険図で見ると、当初から必ずしも一区画のみを所有していないことが分かる。東堀留川が水面をたたえていた頃に河岸地とともに向かいの土地も同時に手に入っていたようだ。河岸地も、埋め立てられた土地も平均30坪と企業として会社や工場を立地させるには小規模であったことから、いくつかの土地を合筆させ広い敷地とした。

河岸と「堀留」

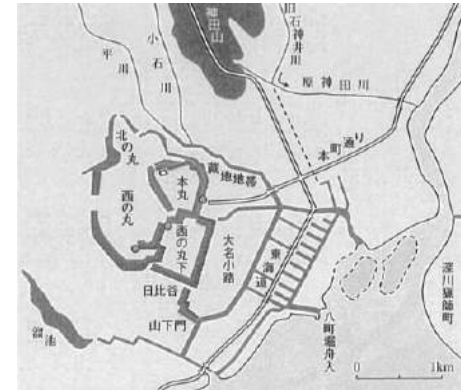
川を上流から埋めていき、下流部分を埋め残して水路としたものを「堀留」と呼ぶ。「堀留」は船で運ばれる物資の集散地として賑わう一大流通センター地帯となった。

東堀留川があった日本橋堀留町は、旧石神井川支流の上流から埋め立て、その河口部を埋残して水路とした地域である。江戸時代以前、東堀留川と西堀留川は旧石神井川から、（現在は消滅してしまった）お玉が池を抜ける河川の河口部であったが、幕府開幕とともに、城下を水害から守るため、旧石神井川をはじめ、江戸北部から城下に流れ入っていた河川の放水路を神田川へ移した。そして残った河口部を江戸城建設や大名屋敷の建設など城下の整備に必要な物資を水上輸送するための船着き場として機能させていった。陸上輸送手段が未発達であった江戸から明治時代初期において、まとまった荷物を運ぶための水運輸送の重要基地となった。「堀留」は物資輸送の通過点ではなく、船を乗り入れ、船荷を下す目的でのみ使用されていたため、「堀留」には多くの河岸が存在したのである。

1540年頃

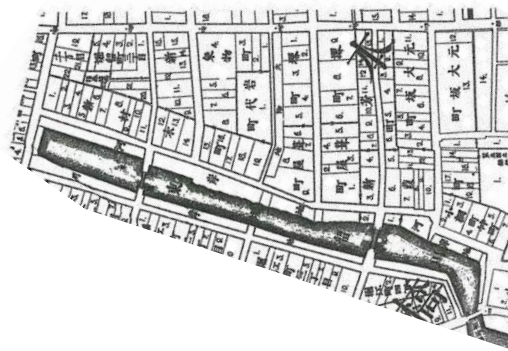


1612~15年頃



『スーパービジュアル版 江戸・東京の地理と地名』より

明治17年頃（東堀留川以東）



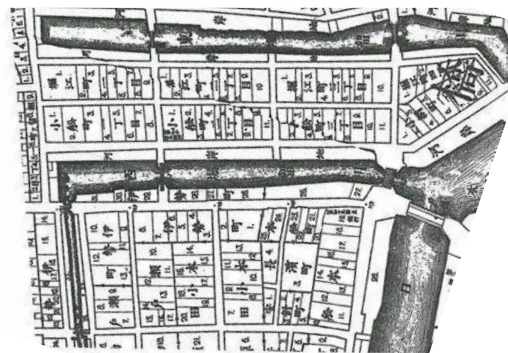
昭和7~11年頃（東堀留川以東）



昭和30年頃（東堀留川以東）



明治17年頃（東堀留川以西）



昭和7~11年頃（東堀留川以西）



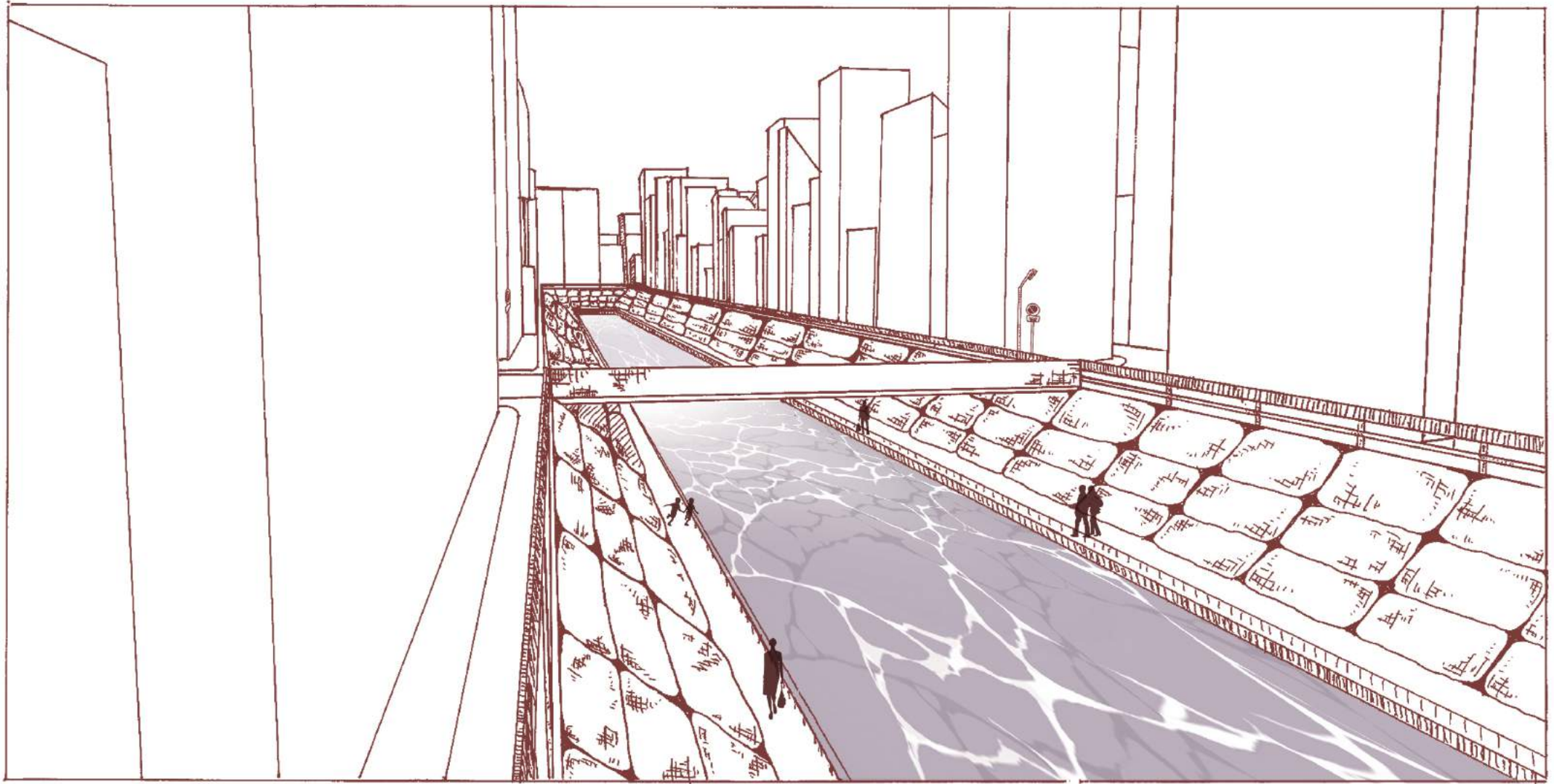
昭和30年頃（東堀留川以東）



『参謀本部陸部測量局東京五千分一図』より

『火災保険地図』より

『火災保険地図』より

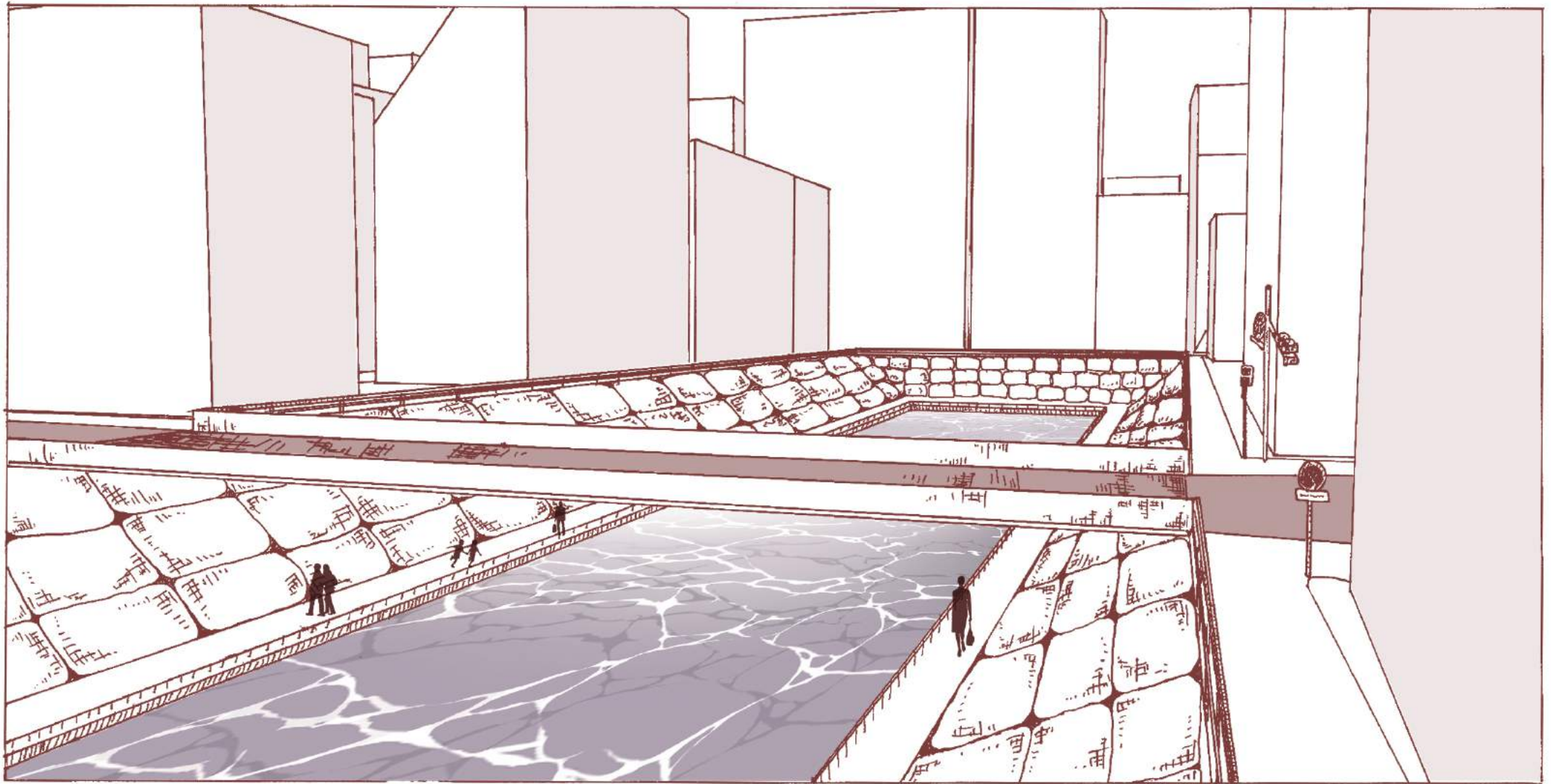


- ・川幅を現在の堀留公園と同じとし、広く開放的な堀留川を再現
- ・水位は現在の日本橋川と同じとし、一段下がった河原に遊歩道を設置
- ・太鼓橋の様に大きく傾斜した橋は、現代の車両による交通を考え直線に近い形とした。

現在の堀留公園を川として掘り起こすことにより、生まれ変わった景色を再現した様子。

川幅は現在の堀留公園と同じに設定することで、高層の建物が隙間なく立ち並ぶ街中に当時の様な開放的な癒しの空間を取り戻すことができました。

この堀留川は日本橋川に合流する川であるため水位を低くする必要がありました。しかし、水位を低くしたことで生まれた空間に遊歩道を設置することで堀留川の河原にも喧騒とした都市から切り離された静寂な空間を作り出すことができました。

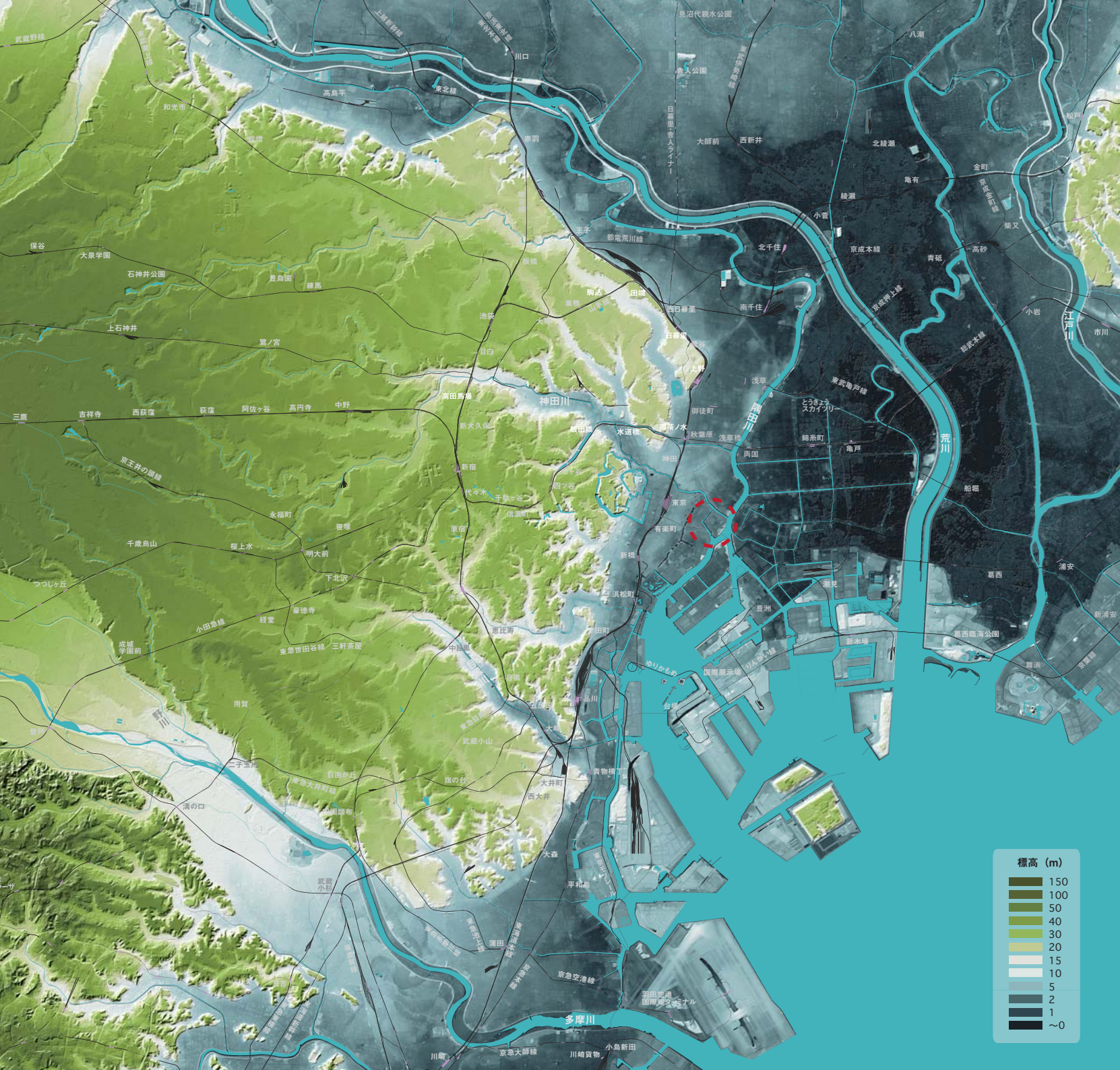


- ・川幅を現在の堀留公園と同じとし、広く開放的な堀留川を再現
- ・水位は現在の日本橋川と同じとし、一段下がった河原に遊歩道を設置
- ・現在の堀留公園を川として掘り起こし当時河原あった地点と同じ位置まで再現

現在の堀留公園を堀留川として掘り起こし、当時と同じスケールで再現しました。それにより現在の堀留公園の敷地に沿う位置にあった萬橋も再現でき、より一層当時の堀留川が現在も存在していたら予想される景色に近い姿になりました。

<参考文献>

- ・スーパービジュアル版 江戸・東京の地理と地名：鈴木理生
- ・川と掘割”20の跡”を巡る江戸東京歴史散歩：岡本哲志



新川

霊岸島・新川の水景観再生

——調査その1

陳明 高大林 高天天 于家興 彭垂雲
18U1139 18U1123 18U1124 17U1301 15U1302

2. 越前堀の変遷

1. 地形の形成



出典:江戸の川・東京の川

①. 道灌時代、霊岸島はまだ低湿地で、潮の満ち引きによって見え隠れだった。この状態は慶長時代まで続いていた



出典:江戸の川・東京の川

②. 隅田川の河口に位置したこの地域は、川の上流から流出する土砂の堆積によって、だんだん潮に影響されない島になった。



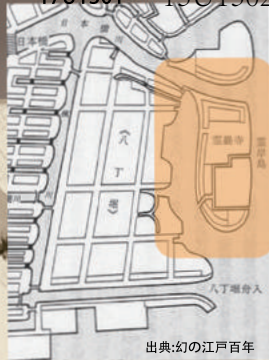
出典:江戸の川・東京の川

③. 寛永元年（1624年）向井忠勝が屋敷地東方の沼沢地を幕府に寄進、霊巖に下賜された。霊巖はこの地を埋め立て、霊巖寺を創建した。現在の新川一丁目、二丁目の雛形は出来上がった。

地形の特徴

この地域はほとんど埋め立て、人工的造成によって出来上がったから、起伏に乏しく、傾斜も極めて緩い。路上を普通に歩いてみたら、土地の高低はほとんど感じられない。墨田川に面した川沿いは沿岸整備によって、緩傾斜型堤防が建てられ、堤防前に水面標高とほぼ同じのテラスが作られた。

出典:TOKYO新川ストーリー



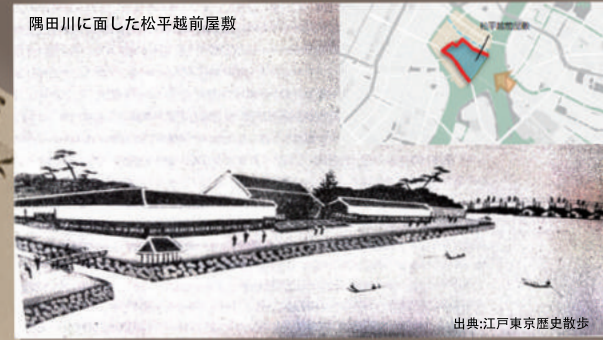
出典:幻の江戸百年

寛永元年（1624年）雄誉霊巖上人という僧が八丁堀の海を埋め立て、陸地を築く、いわゆる霊岸島。そこに霊巖寺を創建した。明暦3年（1657年）の大火で焼失した霊巖寺は深川へ移転。その後、霊巖島という名前だけ残ったが、次第に、霊巖島→霊岩島→新川と名称が変わっていった。



復元江戸情報図に基づき作成

寛永11年（1635年）には、寺地の南方に、越前福井の藩主松平忠昌が2万7千余坪に及ぶ浜屋敷を拝領した。邸の北、西、南に船入堀が掘られ、コ字型になっていた。堀の幅は20~30m。北の一部と西の幅は狭い、基本排水路となった。南側は運河としても用いられ、荷を積んだ小舟が通っていたそう



出典:江戸東京歴史散歩

明治5年（1872年）松平越前守家は本宅を他のところに移し、越前堀の屋敷は明治政府に没収された。松平越前守の屋敷は幾つかに分割され、新たな所有者が名を連ねる。隅田川に面した土地は橋本という方の領地になって、倉庫業を展開した。



出典:江戸東京歴史散歩

注:地図は明治6年「第一次区法施行」を参考に

明治後期の市区改正事業及び大正時代の関東大震災後の帝都復興事業によって越前堀が埋め立てられ、1957年の時点に南側に僅か一部だけ残された。1961年前後、八重洲通りに化してしまった。



出典:江戸の川・東京の川



参謀本部測量図に基づき作成

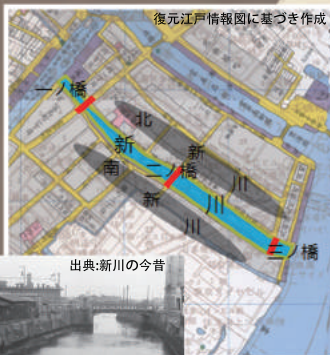
明治初期西と北の一部、南の一部が埋め立てられた（黄色い部分）北と南の堀は半分くらい残された。

霊岸島・新川の水景観再生

――調査その2

3. 新川の変遷

新川は現在の新川一丁目3番から4番の間を流れた運河規模は延長約590m、川幅は約11mから16mと狭いところと広いところがあり、西から一ノ橋、二ノ橋、三ノ橋の三つの橋が架かっていた。新川の両岸を北新川、南新川と名付けた。開削された後、間もなく、両岸に数十軒の酒問屋の大きな店舗と土蔵造りの酒蔵が並んでいた。



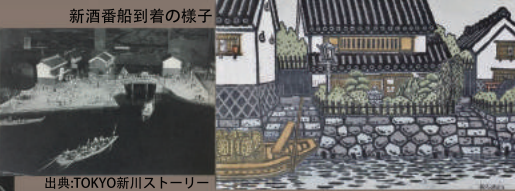
河村瑞賢と新川の開削

江戸幕府の御用商人伊勢国に生まれ、江戸に出て材木商人となって諸国から船で材木を江戸へと運ばれる。物資の陸揚げの便宜を図るため1660年に河村によって新川が開削されたと言われている。新川開削の功績を賞して、幕府は河村に霊岸島の西北、新川一ノ橋付近に広大な土地を与えた。

新川が開削された当初は、材木問屋が数多くある。後数十年間、日近に集めていた酒問屋がほとんど新川に店を移し、新川は江戸における最大の酒類集散市場となった。



出典:TOKYO新川ストーリー



出典:TOKYO新川ストーリー

江戸は年間万樽以上清酒を消費したが、その大半は伊丹からの下り酒であり、それが海路を番船で入津し、この新川に回漕荷揚げされ、そして市中近に売り捌かれた。「春夏秋冬酒不断、東西南北客争沽」の盛況「酒の町」

インターネットより

絵に描いた新川問屋



出典:新川の今昔

震災後 永代橋付近の惨状

大正時代 水運衰退の始まり河口にあるため、川から流出する土砂によって水深が浅くなりやすく、港都としての限界がある。 第一次世界大戦時に船が不足し運賃が高騰していた。 関東大震災が起き、京橋区は壊滅的打撃を受け、焼失面積90%を超えた、下り酒問屋の店舗を焼失。 物流の主役は船から鉄道やトラックの陸上運送に変わってゆく。



昭和20年3月10日の空襲 (ピンク部分は焼失された)

Wikipediaより

昭和・第二次世界大戦

東京大空襲で中央区は壊滅的な被害を受け、新川も廃墟と化した。



4. まとめ

地域内の運河がなくなり、江戸時代の盛況姿がほぼ消えてしまった；
高層のオフィスビルに囲まれ、閉鎖感極まり、人間的な尺度が乏しい；
隅田川に面した地域の景観が抜群だが、敷地内では乏しい。

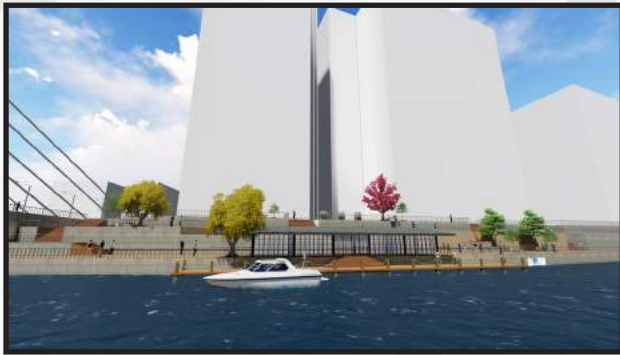


1948年3月 埋め立て中

1949年 埋め立て前の新川

1963年 東京オリンピック前

戦災復興期、戦災残土の処理のため、1948年（昭和23年）から埋め立てが開始され、翌昭和24年には完全に消滅した。



1 Water Taxi Station (新川船着場)

江戸時代に、ここは貨物の中回った船の乗り場として存在している。現在は水路と連絡がない、だから、デザインの中で、既存の水上タクシー船着場システムを利用し、新しい乗り場を増設し、都市の水路と連絡していく。

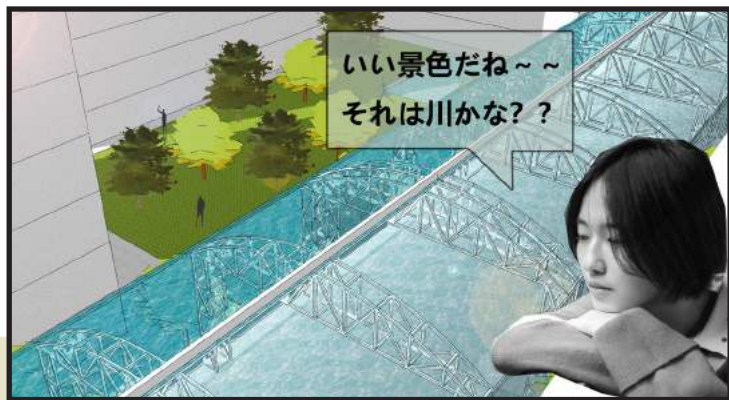
既存の地形によって整備を再開し、高差を利用して多層展望の展望台を作る。

水系では、デザインの中で設備を通して隅田川の水を場に入れて、積み重なった台地を通して最後に隅田川へ帰る。水系を通じて場所を隅田川に連絡し、さらに水系は浅水で、人が集まる空間を形成できる。



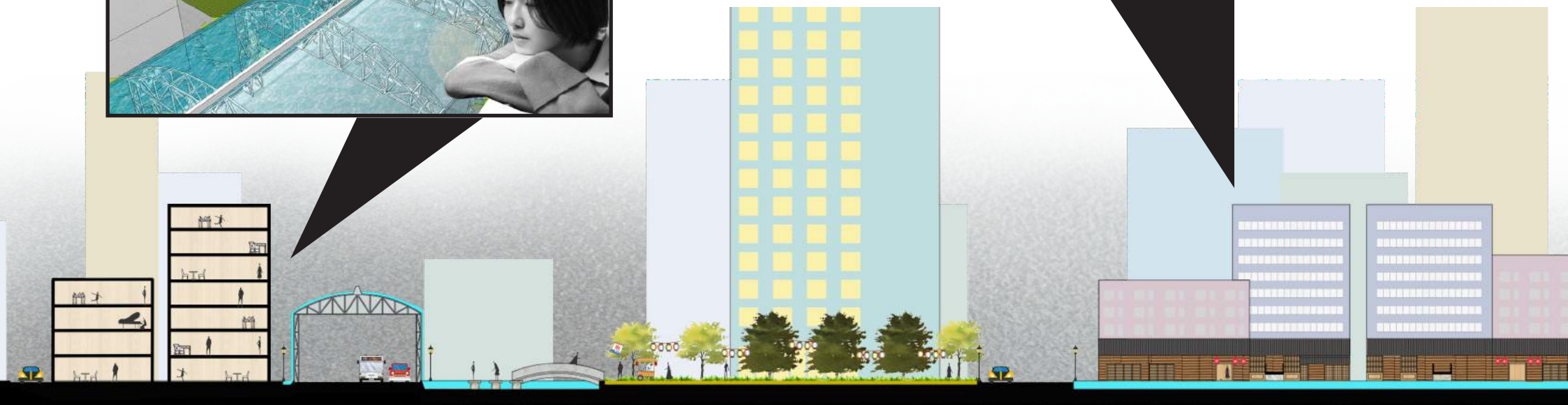
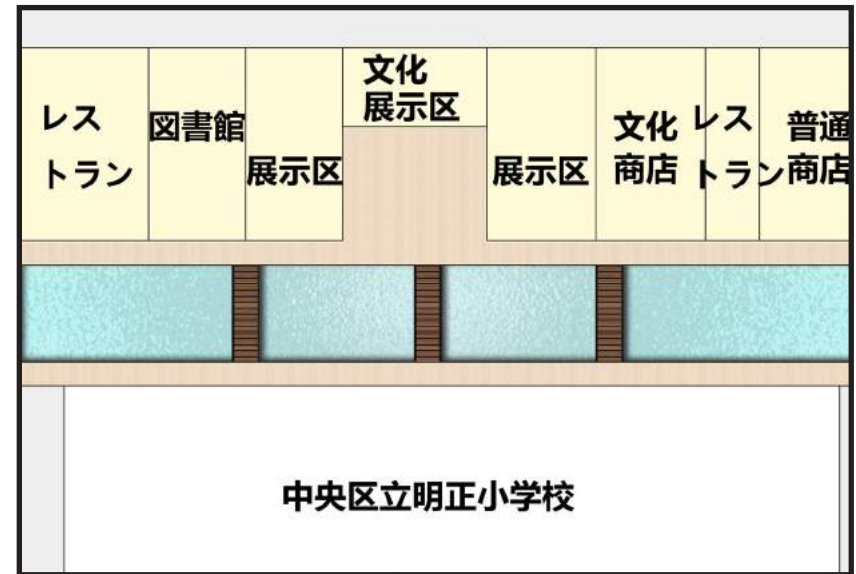
2 Water Route (水の道)

以前の越前堀の20mの幅により、構造体の上に水の道が設計された。高層ビルから見下ろすと、江戸時代の越前堀の存在感を感じることができる。そして、道に歩きながら美しい水の景色を楽しむことも可能だ。



3 Culture Bank (水の浜)

この地域では、当時の越前堀の水景観が復元され、酒問屋の立面特徴に合わせて建物の一層が設計された。機能には、文化展示区、レストラン、図書館、商店などが含まれている。労働者や観光客だけではなく、小学校の生徒もここで霊岸島の伝統文化を理解することができる。



4 Shingawa Park (新川園)

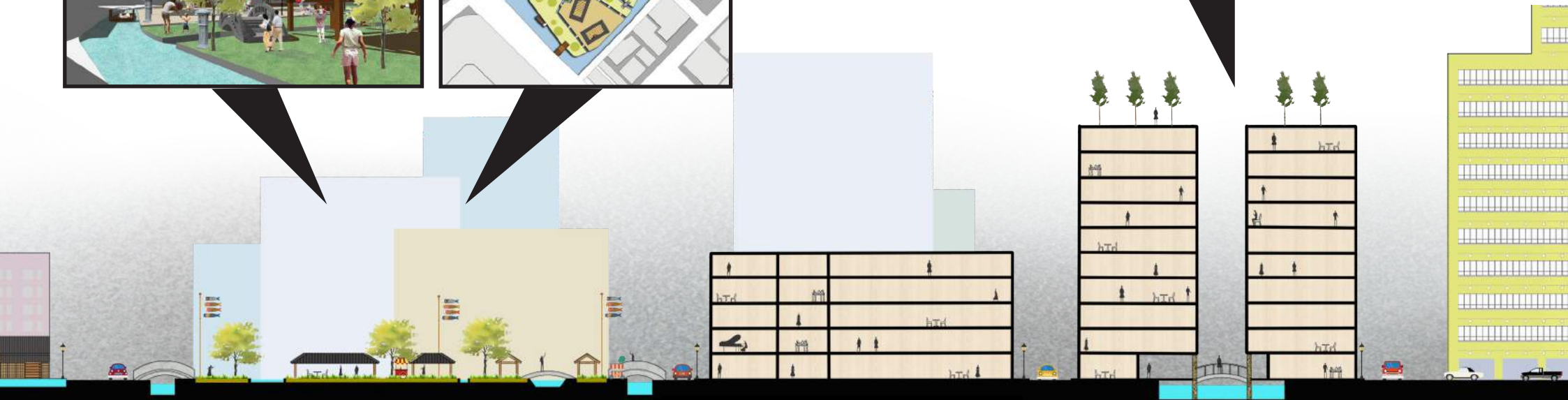
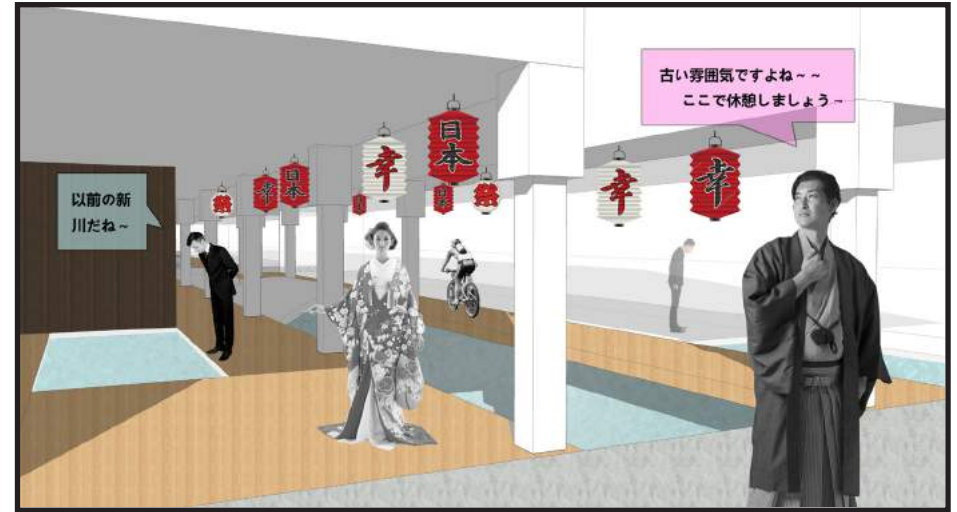


江戸時代の靈岸島の地形を縮小し公園で復元しました。時代を表す街灯や樽や建物で江戸時代の光景に連れて入り、子どもが船でその時代の靈岸島も感じられる。



5 Hidden Water (陸化の川)

以前の新川の約15mの幅により、建物の間と下で美しい水景観が設計された。人々はここでリラックスして、新川の存在を感じることができる。



東京発掘プロジェクト～水辺編～

発 行 法政大学江戸東京研究センター
監 修 高村雅彦+皆川典久
編 集 法政大学高村研究室
印 刷 正文社
発行年月 2019年3月
連絡先 〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-3
Tel 03-3264-9682 Fax 03-3264-9884
U R L <https://edotokyo.hosei.ac.jp/>